生の四苦を脱し得るか」

「汝は何をいふのである、苦行したる結果は、經典に敎えあるごとく、天上界に上り人生の苦を知らないのみならず無上の樂みを得られるのである」

「敎典に從へば、天上の樂みと雖ども終に盡る時がある、其の時再び天道に輪廻して苦衆に陷ることになる、おん身等は何うして此の大苦難を解脱せんとするか」

「我等は、たゞ敎文の敎ゆる所に從つて苦行するのみ、其の餘を考へる必要はない」

バカ仙人は、終に答ふることが能なかつた。要するに仙人の思ふ所は、其の身體を苦しめて、あらゆる難行苦行をすれば、終に樂しき天國に生れることが能ると信じたので古き經典が敎ゆる所に從ひ、修行するだけの事で、人生の解脱し得る眞理は措いて問はないのである。

悉達太子は、こゝに於て斯のごとく考へた、生を求むるものが、生を求め得た後は復た死に遇はねばならぬ。して見ると務めて樂を求むるものも、樂を求め得れば、復

た苦境に沈まねばならぬ。彼等バラモン敎徒等が行ふところは、先づ忍んで其の結局は苦の果報を求めることゝなる、世に斯んな馬鹿らしいことはない。云ひ換へれば、苦行を修めて天に生ずるとは云へ、天界には一定の年限がある、此の期限を過れば、また地獄、餓鬼、畜生、修羅、人間、天上の六道の間に轉生し、苦のために纏はれ、終に苦を離れることはできなくなる。だから無上の智惠を磨き、苦樂兩つながら捨て寂靜無爲の境に入ることは能ない、何のために苦行するのか、其の意を解するに苦しむ譯だと思はざるを得なかつた。

悉達太子は、バカ仙人の苦行を疑ひ、彼の許にあつて一夜議論を戰はした、が其の云ふ所は終に太子を服することが能なかつた。

太子は、バカ仙人の賴むに足らざることを知るや、直ちに彼の許を辭し、ラーマの深林を出で、それより南方マカタ國の、ミロウ山といふ山中に、マラーラ仙人とて、德行高き悟道者あることを聞き、この仙人を訪ねて道を聞くことに定め、再び道なき

道を踏分け、たゞ一人、足に任せて南方へ向つた。

太子は炎天を冒して歩む内に、次第に渇きを覺えて來たので、何れか休むべき場所はないかと四方を見廻すと、遙かに椰子樹の林があつた、彼は悅び勇み、足を早めて道を急ぎ、間もなく鬱蒼たる林についた。

太子は一つ二つの果實を取り、之れを口にして渇を醫しつゝ、フト四邊を見廻すと年若き一人の女が、程遠からぬ所に倒れてゐた。

彼は不思議に思ひながら、其の女の傍近く進むと、此時女は、フト眼を覺し、つらつら太子の顏を眺めて居たが、やがて恭しく一禮なし、

「貴下は太子樣、能くマア無事で居て下さいました」

と云つて、早くも涙ぐむのであつた。

「我を知る上は、もしや汝はカピラ城からでも來たのではないか」

「お察しの如く、妾は、ヤユダラ樣にお仕へ申す、アバラといふものでございます」

「そのアバラが、何故あつて斯る所へ參りしぞ」

「太子樣にお願ひ申したいことがございまして」

「予に願ひと申すは」

アバラは、彼が出立後に起りし珍事を洩なく話し、

「斯んな場合でございますから、太子樣には一日も早く御歸城下さいまするやう、アバラ此れより御伴仕つりまする」

太子も意外の珍事に驚いた、一旦カピラ城に歸り、惡徒等を取鎭めたる後、再び出家しやうかとも思つた、が、ぬけ難き城内を拔出して、漸く悟りの道を修めんとするものが、心弱くては叶はじと、再び心を取直した。

「アバラよ、予は一旦志を決して、斯く出家したる上は、たとひ如何なることが起らうとも、修行を積みたる上ならでは、再び父にも母にも、又たヤユダラとも逢ふことは叶はぬぞ、早く立歸つて、我等が無事修業なし居ることを知らせ、人々に安心さ

せるが何よりである」

「何と仰せ遊ばしても、妾は一人で歸ることはできませぬ、太子樣が是非お歸り遊ばさぬならば、妾は再びヤユダラ樣に顏を合すことは能ませぬ、此所で此のまゝ自害して相果てまする」

と云ふより早く、アバラは懷劍を拔放ち、己に斯うと覺悟を定めた。

悉達太子は、早くもアバラの腕を取押へ、その懷劍を奪ひ取り、言葉和かにアバラを諭した。

「聞き譯なきことを云ふものではない、お前が此所で死んで何になる、お前が死んで了へば、我が音信は誰れがする、いよ〳〵死ぬる覺悟なら、一旦カピラ城に歸り、ヤユダラに斯々と告知らせ、其の上にて自害いたすならば兎に角、今此所で死んでは犬死といふものぢや」

アバラは、太子の道理ある言葉に、今は死ぬこともならず、たゞ怨めしさうに彼の

顏を打まもり、涙に沈むばかりであつた。

太子は尙も言葉をつゞけ、

「ヤユダラの悲みは、予も充分に之れを察するけれど、一時惡人等が企むところは、何時しか破れて了ふものである、たゞ其の身の過ちなきことが明かになるまで、耐忍べば足るのである、斯んな場合には、ヤユダラに仕へるお前達は、如何やうにもして彼を慰めやるべきである、我儘勝手なる自害などして、獨りヤユダラを殘して苦しませる不忠ものがあるか、又たヤユダラにも能く云聞せて呉れ、疑ひの雲は何時しか晴る、如何なる難きことも、我が身の苦行に比ぶれば、物の數ならぬことを忘れな、予は何時か修行解脫の上、彼のみならず父上も母上も、此世の苦みから救ひ參らせるであらう」

と、事詳かに道理を說聞せた。

アバラは、太子に諭され、その言葉に從つて、一先づカピラ城へ立歸ることに決心

した。

「仰せられましたことは能く解りました、これより御言葉に從ひ、ヤユダラ樣に忠義をいたします、太子樣には一日も早く御修行の上御歸城遊ばされるやうに願ひあげます」

「よく申した、予の言葉が解つて滿足いたす、此の上は早く歸つて人々に安神させるが肝要である」

と云ひ捨てゝ、太子は其所を立去らんとした。

アバラは、慌てゝ太子を引止め、

「太子樣、甚だ恐れ入りますが、何か紀念物のお品を下し置れまするやう願ひあげます、然うお願ひいたしますれば、ヤユダラ樣始め、其の他の方々樣も御安心遊ばされる事かと存じます」

「なるほど能く心附いた、別に取すべきものもないが」

と云つて太子は暫し思案したる後、椰子の葉を取り、これに無常といふ二字を書いて渡した。

「今一ツお願ひがございます」

とアバラは太子を見上げた。

「他の願ひと申すは」

「太子樣の御住居は、何れでございませうか」

「それは定まらない、最早此の山に用もないことであれば、これよりミロウ山へ赴むき、彼の有名なるアラーラ仙人（アララ仙人ともいふ）を訪ねたく思ひ居る所ぢや。が、修行の身の上であれば、何時何れへ行くかも知れない、必らず再び予を訪ね來ることは許さぬぞ」

何時まで話すも盡せぬことであるから、太子は別れを告げて南に向つて立去つた。

アバラは太子の後を見送り、其の姿の見えなくなるまで、茫然と立つてゐた、が能く

考へて見れば斯うして居る場合ではない、早くアビラ城へ歸り、太子の樣子を傳へるが第一だと決心した。

彼のヤユダラは、アバラに別れて、頑是なき我子を膝に乘せ、獄舍の裡で泣沈んで居ると、足音あらく役人が入來り、

「ヤユダラ殿、いよ〳〵其方親子の罪定まり、南柯女の計ひにて、二人とも斬罪と決しました、急々御仕度いたされよ」

と云て、二組の白無垢を渡した。

ヤユダラは、斯る役人等に逆らつた所で仕方がないと思ひ、手早く白無垢に着換へ屠所の羊のごとく、彼の役人に引立てられた。

斯くとは知らず、カビラ城の大忠臣優陀夷夫婦は、太子の身の上及びヤユダラの身の上を案じ居る所へ、彼の右梵兒が驅けつけ來り、

「御注進でございます」

「ウム、何事であるぞ」

「只今怪しき女の乘物が、切手なくして西の門を出で行かんとするゆゑ、引止めて取調べまするとの事、如何相計らひませうか」

優陀夷は大に驚き、

「ソは一大事である、某に沙汰なくして死刑に行ふとは言語同斷、早く立歸つて、ヤユダラ樣の乘物を奪ひ返せよ」

「畏まりました」

と、右梵兒は宙を飛んで驅出した。

優陀夷大臣は、早速參內して淨飯王に拜謁し、

「我が君に申上げます」

「何ぢや」

「ウム、何事であるぞ」

「只今怪しき女の乘物が、切手なくして西の門を出で行かんとするゆゑ、引止めて取調べまするとの事、如何相計らひませうか」

優陀夷は大に驚き、

「ソは一大事である、某に沙汰なくして死刑に行ふとは言語同斷、早く立歸つて、ヤユダラ樣の乘物を奪ひ返せよ」

「畏まりました」

と、右梵兒は宙を飛んで驅出した。

優陀夷大臣は、早速參內して淨飯王に拜謁し、

「我が君に申上げます」

「何ぢや」

「實は、只今ヤユダラ樣を斬罪に處せんと致し居ります、如何相計ひませうか」

と、優陀夷は、右梵兒より聞取りし一伍一什を言上した。

淨飯王は大に驚き、

「そは怪しからぬ事急ぎヤユダラを取返へせよ」

「委細右梵兒に申含め置きました、ヤユダラ樣のお身の上は萬々氣遣ひございませぬが、此の處置は如何仕つりませうか」

「南柯のことであるか」

「ハイ、彼の南柯は、解飯王の御領分内に住む惡逆無道なる男の娘に、鬼子母といふものあり、その鬼子母は一生の中に一千人の子を産みたいと誓を立て、何人の子によらず、人の子を盗んでは喰殺して居りました。そして彼の提婆太子が生れられた時にこれを喰殺さんとした惡魔でございます」

淨飯王は、優陀夷の言葉を聞き、

「サニ南柯女は惡魔だと申すか」

と顏色を變へて云つた。

優陀夷は落付拂つて、

「鬼子母と申し恐ろしき惡魔にて、已に提婆太子を取殺さんとしましたが、太子の相貌凡ならざるに驚き、寧ろ太子を育てあげ、充分に魔法を敎へ込み、五天竺を掌握させて、己れ權勢を專らにせんことを考へ、手蔓をもとめて乳母に住込み、目的通り太子を育てあげました、ツして太子の命により、五天竺の王となるには、是非なくてはならぬ寶物あり、これを當城から盗み出して提婆太子に與へんため、名を南柯と敎めて當城に宮仕へいたし居ること、間者のものが悉く調べ歸りました」

と提婆、南柯等の企みを、委細言上した。

淨飯王は、斯と聞き大で驚き、宮中は大騷ぎとなつた。

此時彼のアバラは、悉達太子から渡されたる書付を持ち歸り、宮中の騷ぎを聞き、

早速優陀夷の妻に逢つて、委細のことを物語り。優陀夷の妻は、直ちに宮城に驅つけ此の旨を優陀夷に傳へた。

優陀夷は、悉達太子の無事なること、アバラが紀念の書付を持歸りたることを淨飯王に告げ、こゝに南柯等の惡企みが一々明瞭になつた。

南柯は、優陀夷が逃べたるごとく、全く寶物を盜み出さんがため、又た一つにはヤユダラをも奪ひ去らんがために、カビラ城に老女と化けこみたるもので、前身鬼子母といふ惡魔であつた。

南柯は、宮中が騷がしいので、ソッと樣子を聞いて見ると我が身にかゝることである。グズ〳〵して居ては一大事、少しも早く當カビラ城を立退んものと、俄かに仕度をとゝのへ、乘物を飛ばして城門を出やうとした。

スルと後ろから呼止めるものがあるから、人夫は其所へ乘物を下した。所へ多くの女中共が、淨飯王の命を受け、武器を取つて乘物を取圍いた。

南柯は、

「ア、殘念なることをした、早くも手が廻つたか」

と獨言しながら躊躇つて居る。

宮女等は、

「サア、南柯、天の網は降りた、モウ逃れぬ所であるぞ、早く其の乘物を出でよ」

と、口々に叫ぶのであつた。

「オ、如何にも其れへ出る」

と云つて南柯は乘物の垂簾をあげ、悠々と立出た。

彼女の相貌は、これまでとは變り實に恐ろしき鬼女のごとく、多くの宮女等は膽を冷した。

「ハ、、、、此りや女中達、汝等にオメ〳〵と捕へられる南柯でない」

と、彼の鬼子母の南柯は、ギラリと懷劍を引き拔いたから、誰あつて傍へよりつく

ことは能ない。

宮女等が、たゝ打ち驚いて居るので、南柯は、其の隙を見て、バラ〳〵と城の壁に飛び上り、飛鳥のごとく身をかはして城外へ出た。

かねて斯る事があるならんと、彼の右梵兒は、捕手のもの等を引きつれ、壁の外を護つて居た。

「夫れ逃出したぞ、もの共かゝれ」

と一同は南柯の前に立ち塞がつた。

けれど多勢とは云へ、相手は魔術を使ふ南柯である。此所にあるかと思へば彼所にあり、變現出沒自由自在にして、容易に取り押へることが能ない。

豪勇なる右梵兒は、之れをもどかしがり、人々を押し分け、突然南柯の前に進み、眼にも止まらぬ早さを以て、彼の女の腰のあたりを蹴りつけた。

右梵兒の大力に蹴飛ばされて堪るものではない、流石の惡魔も其の場にドウと倒れた。

「サア占たぞ」

と多勢の捕方は、南柯を組しき縄をかけんとした。

スルと南柯は、聲高く、

「無念」

と叫ぶや、ゴーッといふ物凄き風が起り、俄に黑雲が下たかと思ふと、四邊は眞の暗となり、篠つく雨は天地をも崩さんばかりに降り出した。

一同のものは、たゝ驚くばかりで、何うすることも能ない、右梵兒は、傍近くにあつた大木の上に上り、眼をすまして魔風の止むのを待つて居た。

右梵兒始め一同の捕人が驚いて居る内に、南柯の姿は、何れともなく消せ失せて了つた。

提婆太子は、今日いよ〳〵ヤユダラを奪ひ出すといふ知せ、あつたから、多くの伴

をつれ、密かに西門の傍に待つてゐた。スルと俄に城内が騒がしくなり、アッと思ふ間に、彼の南柯が、鬼子母の姿を現はして逃行くを見て、サテは事露見に及んだとみえる、殘念のことをした、と甚く無念の齒を喰しめた。

高きに上り居りたる右梵兒は、南柯の姿が消ると同時に、雨は止み雲は晴れたから、遙かに提婆の姿を見つけ、サテは鬼子母も彼所に逃げたるかと、たゝ一人が西門を指して馳出した。

提婆は斯くと見て、

「向ふより來るは右梵兒に違ひない、日外彼奴に恥辱をうけたことがある、もの共ぬかるな斬殺して苦しうない」

と云つて、今や遲しと待受け居る所へ、右梵兒は多勢を怖るゝことなく、眞一文字に驅來り、

「珍らしや提婆、我が手並にこりもせず、日々惡業を增長し、鳥、獸類にも等しき心

である。よくも當城へ鬼子母を忍ばせたな、けれど吾等ある内は、汝等ごときものに當城へ指でもさゝせるものではない」

「己れ小癪なことを云ふ、もの共打ち取れよ」

「畏りました」

と、多勢のものは一時に斬りつけたが、何條右梵兒に敵すべき、忽ちの内に四五人のものが叩き倒された。

「敵はぬ〳〵」

「逃げろ〳〵」

と、一同は、バラ〳〵と逃げ出すのであつた。

提婆は、

「言ひ甲斐なきもの共である、吾が魔術を以て、彼を苦めくれん」

と云て、何か呪文をとなへた。

間もなく天地は鳴動し、大地は裂け、その裂け目からは水が迸しり出で、忽ちにして四面海に變じ、荒浪立ちて右梵兒を溺死させんとする、流石の右梵兒も、この水責には大に困つた。

が、元來が豪勇なる右梵兒、斯うなる上は仕方がない、此の上は提婆太子を捕へ、共に供に溺死して、後の憂を斷つ外はないと決心した。

いよ〳〵溺死と決心した右梵兒は、荒立つ浪を怖れず、提婆を目蒐けて飛つき、將に之れを捕へんとする時、彼の姿は消えて了つた。

提婆の姿が見えなくなると共に、天地は穩かになり、右梵兒は危く生命を全ふすることが能た。右梵兒は餘りの奇異に驚きながら、惡計はかり難き惡魔等が、自分の留守にうけ入り、ヤユダラを奪ひはせぬかと氣遣はれるので、彼は深くも提婆等を追ゆかず、其の儘城内へ歸つて見たが、幸ひにヤユダラは何の變りもなかつた。

右梵兒は、早速ヤユダラ親子の伴をして優陀夷大臣の家に來り委細の物語をした。

優陀夷夫妻は、ヤユダラ親子を御居間へ迎へ、

「サテ、南柯の惡事は、實に言葉に盡せぬことで、さぞ御難澁でございましたらう、斯なりました上は、少しも御心配には及びません、御心安く思召しあそばせ」

と、涙を流しつゝ、いろ〳〵と二人を慰めた。

四人のものは、互ひに過し出來事を語り合つてゐる所へ、彼のアバラが、目通りを願ひ出た。

ヤユダラは、アバラが來たと聞き、非常に悦び、優陀夷が止めるのも構はず、自ら立ちあがつて、アバラを迎へた。

アバラは、ヤユダラの出迎ひを受け、餘りの嬉しさに我を忘れて、ヤユダラに抱きついた。

「我が君樣には無事でございましたか、若しかの事があつてはと、何れほど心配いたしたか知れません」

「オ、、アバラよ、能く無事で歸つて呉れました、お前我が夫悉達様から、無常といふ書附をいたゞき、妾の疑ひも晴れたのである、此の恩は忘れませぬぞ」

と云つて暫し打案じて居たが、やがて再び口を開き、

「お前は死んでも太子様をお連れ申さねば歸らぬと云やつたが、太子様をお連れ申したかい」

アバラは、ギョッとして急には答へも爲かねたのである、稍しばらくして乾度心を取り直し、

「我が君様に御約束いたせしごとく、太子様がお歸り遊ばさねば、妾も再びお眼にかからぬ覺悟でこざりました、が、實は……」

と、アバラは、太子に諭されし一伍一什を物語り、襟を正してヤユダラの擧動を見守るのであつた。

「太子様の仰しやること、妾は少しも御無理とは思はねど、此の上何んな目に逢ふか

と思ふと、妾は、口惜しふて哀しふて……」

「我が君様のお心は十二分にお察し申しあげます、が、何も彼も御存じの太子様、トテも妾共の働きでは……」

「トテも力が及ばぬと云やるのか……何も彼も御發明で居らせられる太子様、少しは妾の身の上も」

と、理も非も考へる暇なく、ヤユダラは早や涙に沈むのであつた。

「御道理でございます、つきましては我君様には、如何遊ばすお考へでございます」

「何うすると云つて、妾の考へには及ばぬゆゑ、お前達がよしなに計ふてくれよ」

「太子様の仰せられることは道理ではあるが、何と申してもカビラ城のお世嗣である普通のものと同じ譯には參らぬ、シテ太子様の御住居は分らぬと申されたな」

優陀夷は、何か心の底に思案を定めたらしく、斯く云つて二人の顔を見比べるのである。

「ハイ、お住居は分りませぬが、マカダ國の、ミロウ山へお越しになることだけは承はりました」

「其れさへ判れば何も心配はござらぬ、優陀夷が引受けてお連れ申します、姫君には御安心遊ばされよ」

と云つて、優陀夷は早くも身仕度するのであつた。

「お前がお連れ申すと請合へば、妾は少しも心配いたさぬ、が、おん身何れへ參るのぢや」

優陀夷が居なくなつては、又た何んな心配を見るやも計られないと、ヤユダラの顏には、少からず不安の色がほの見えた。

「此れより國王陛下にお願ひ申し、辯舌と才學勝れしものを選び、直樣太子樣の後を追ひ、御歸城遊ばすやうお勸め致す考へでござります」

「おん身も、マカダ國へ待く考へであるか」

「私も往きたいは山々でございますが、何をいふにも近頃の有樣では少しの間もカピラ城を離れることが能ませぬ」

と云つて暫らく考へたる後、

「兎に角淨飯王樣の御指圖を願ひませう」

と云つて、優陀夷は宮中を指して急いだ。

優陀夷大臣が、淨飯王に奏上したる結果は、三人の博士をして、駿馬を飛ばし太子の後を追ひ、その思想を飜へさせることゝなつた。

こゝに於て三人の博士は、多くの從者をつれ、マカダ國の、ミロウ山を指して急いだ。

此の時太子は、足に任せて南に進み、或る日暮に、馬を連ねて我を追ふものがあるのを見て、杖をとゞめ其の近づくを待つと、彼の三博士等が、彼を抑留せんが爲に來たのであつた。

三人の博士は、先づ太子の變り果てたる容貌に驚き、涙ながらに父淨飯王の哀しみ王妃ヤユダラの愁ひ、群臣萬民の失望等、太子がカビラ城を出でし後に現れたる一切の實情を說き、或は理を述べ、或は情に訴へ、一先づカビラ城に還られんことを勸めた。

が、流石の博士三人も、太子の辯舌に及ぶことは能ない、終に太子のために言伏せられて了つた。太子は博士等が口を噤ぐを待ち、

「汝等歸りて父王と、妃と、群臣と、國民とに告げよ、悉達は、一國の主となるべきものではない、人天三界を擧げて我が有に歸せざれば、決して志を挫くことはないたとひ日月地におち、シユミの雪山我が頭に轉ずるとも、我が此の大願は決して渝ることはない」

と、辯舌爽かに論じたので、三人の博士も返す言葉なく、終に空しくカビラ城へ立歸つた。

太子は博士を論して本國へ歸へらしめ、自分は錫をつき瓢然として次第に東南の方に進んだ。博士等は去るに臨んで從者の中から、明敏で忠實なる者を五人附けて、太子と行動を伴にして守護すると云ふ事にした。それで是等五人の者は太子の行かれる跡に從つた。

さて太子はガンカ河の大きな流れを渡つて、マカダ國の境に入つて此の國の首府なる王舍城を通つた。智慧の靈なる光が太子の中に輝いて居るからであらう、風采や態度に普通の人と異つて居る處があつて、威嚴が四邊を拂ふて見えたから、市民は太子の尊き姿を見て、眼を聳だてたのである。

「何うぢや、今度此の國へ巡つて御出になつたお方を見たか」

「俺は未だ見た事がないのぢや、お前はどうぢや」

「俺は今日拜んで來たよ、カビラ國の太子樣ぢやと云ふ事ぢやが、矢張異つたものぢや」

「さうかい、其の樣な尊いお方樣が何うして當地へ來られたのぢや」
「フム、能くは知らんが、何でも尊い敎へを御修行なさる爲ぢやとよ」
「フンム、俺も一度拜んで來やう」
斯く噂が市人の間に盛になつた。スルと終に此の國の王樣の耳に入つた。此のマカダ國はカピラ國の南の方にあつて、國の面積は廣くして、兵隊は强く、其の上土地が豐穰であつたから、國は大變に富んで居た。
時の王樣の名をビンビサラと云つて、武勇であつて智略を備へ、大いに國を大きくして大王にでもならうと云ふ志があつた。そんな王樣であつたから才器ある者を補佐して、自分の大きな志を成さうと考へて居た處へ、以前から名聲の高いカピラ國の太子が、此度巡つて來たと聞て大いに喜んだ。
王は潔かに思ふには、太子は誠に爲す有るの志と、比倫のない才器とを抱いて居ると云ふ事で、文武兩道が衆に秀て居ると云ふ事は前から我が國までも聽いて居るの

である。然るに彼が出家をして、國を去るやうになつたのは、恐らくは其の國が偏僻であつて小さいと云ふ事と、王の位を讓つて貰へぬと云ふことを怒つたからであらう若し然う云ふ事で出家となり、國々を巡つて居るのであつたならば、巧く誘つて利用して自分の大志を遂ぐる道具に使ふてやらふと思つた。
其所で王は直ちに臣を遣して、太子は何うして居るか見にやつた。臣は暫くして歸つて來て、王の前に出で、
「太子はパンダラ山に登つて、一ッの石の上に坐し何か每日考へごとをして居られます」
「さうか、其れでは其處へ參るであらう」
と云つて、王は王衣を纏ひ、金の冠を戴いて、駕に乘つてパンダラ山へと往き、太子に向ひ、
「出家されし人よ、敎えの爲に國では君となれる尊き位置を捨てたまひし、殊勝の高

僧よ、貴方は大國の政治を執ることが、出來るだけの器量を具へて御出でになるのに何が故に乞食のやうに、鉢を手にして跣足で歩まれるので御座りますか、私は思ひますに、凡て心が大きくて其上に志の高い人は萬事の一面ばかりを見て、其れに拘はつてはならぬのであります、富みて貴くなりながら、道を悟らぬものは實に憐れな者共ではありまするが、富と力と道との三ツの物を併せて所有する事が出來て、萬事思ふがまゝにする事の出來る人は、私は明君と申すに憚らぬのであります、道を求めるに必ずしも山や野に於てせずとも、宮殿の中でも出來るではありませんか、私は貴下が天から御受けなされた、才能を持つて御在でになりながら、空しく漂浪の旅に出て御居でなさるのを深く遺憾に思ひます、若し不肖の言を御用ひ下さるならば、私の國土を半分割いて献じませう、また更に廣き土地を御望みなさるなれば、私は四兵と十軍とがありますから、一たび旗を陣頭に掲げて、四方の國々を征めたなれば、各國を併せて治める事は實に容易いことではありませんか、太子よ、否出家されし方よ、よく御考へになりて御承諾下さりますやう」

と諒々として王は說いたのであつた。王は世間的の心を以て太子の心を想像して、太子も亦自分が願ふところの事を云ふであらうと考えたのである。

太子の心は既に世間の俗衆と離れて居る。であるから如何なる甘言も耳には入らなかつた。

太子は靜かに答へて云ふには、

大王よ、王の御志は厚く御禮を申します、併しながら私の志は一國や一城の主となるのではないので、此の廣き全世界の衆生の救主たらんとするのであります、諸の慾望の爲に、世の中の衆生は身を苦め、心を苦しめて、しかも彼等に悟が開けぬため、其の中に溺れて出ることが出來ぬのである。私は悟りを人々に得せしめて、彼等を安らかな世界に導かるゝと思ふのである、私が此の世に生れて來た、天よりの使命は亦是れに外ならぬのであります。大王よ、貴方は富貴と權勢とは、貴方の思つて居

られる程の望ましいものでありませうか、何の樣に地上で王の威先を振つても、たとへ全世界を自分の物にする事が出來ても、絶へず心に苦しみがあつたなら、何うして幸福でありませう、限りなき富も限もなき位も、僅か生きて居る間のことである。限りなき生命を見出だすには過ぎぬのである、限りなき生命を得るには、一切の世の中の榮を幻と思つて、貴き道に志すことである、私は今や此の道に志て居るのであるから、貴方は如何に御勸めなさるとも、貴方の影を追て共に倒れることを望みませうや」

太子は更に云ひ續けた。

「大王よ、貴方は私を憐むのを止めて貰ひ度い、此の廣い世界は我が家であつて、世の人々は我が子である、嗚呼何事も足らぬ事はないのである。大王よ私を憐むことを止めて、其れよりも富貴に惱み、王位に苦んで居るものを御憐れみなさい、人々は妻子の愛に溺れ、寶物を持つて喜び、王の位を貴く思ひ、未だ得ぬものを得たいと思つ

て悶へ、既に得たところの物は失ひはせぬかと思つて心配して居る。併し人は死なねばならぬ、妻子も、寶物も、王位も死んだら携さへてゆく事が出來やうか、死んだならば王たる人でも乞食のやうな者でも何の異つた所がありませうぞ」

熱心に耳を傾けて聞いて居た王は、此の時初めて成ほどと思つたか默頭いた。太子は王が次第に感じて來るのを見て、言葉を繼ぎ、

「誰れが毒蛇の餌食になるのを逃がれて、又更に嚙まれに行くのを喜びませうか、誰れが火事で燒かれた手で又燒け落ちた物を拾ふ者があらうか、さうしたならば誰れが五慾を離れた身を以て、甘じて再び是れに投じる者があらうか、私は妻子を捨てゝ天下の萬民を得たのである、王の位を捨てゝ天下を得たのである、現世を捨てゝ永き生を得たのである。大王よ、私のことは決して心配をせずとも宜しい、其れより貴方が唯何時までも正しい道を踏んで、貴女の國をお治めなさるが宜しい」

王は先より默然として聞いて居たが、聞き終ると共に夢から覺たやうに感じた。實

に王の胸には一道の涼しい風が入つたやうに思つた。

元來印度の諸王國は王位や政權の受け授けが平和の間に行はれることは殆どなくて戰爭の絶間がないのであつた。中にもマカダ國の如きは殊に甚だしいものであつた。

王は太子を自分の方に誘はふとして、却つて意外の敎訓に遇ふて、大いに悟るところがあつたので、深く後悔の色が顏に現れて、恭しく太子の手を捧げながら云ふには

「尊き御出家よ、私の心は非常に汚れて居ました、私は最早貴方に前のやうなことは御勸め致しません、何卒貴方が國々を御廻りなされて、貴き道を充分に御修めなさつた後、此の地に御返り下さつて、私をお弟子にして戴きたいのであります」

太子の感化は忽ち此の王にさへ及ぼしたのである。

斯くて太子はビンビサラ王と別れを告げてアラーラ仙人を訪はふと思ふた。王の城から西南に進んでニレンゼン河を渡つて、尙ほ五六里餘り行くとウイカショウと云ふ人があつた。此の人に二人の弟子があつて、皆火に仕へる法を修めて居り、多くの弟

子を持つて居た。太子は其の人々に尋ねて、

「貴方等は如何なる道を御修めなさるのか」

彼等は答へて云ふに、

「梵天と日月水火を祭るのである」

其所で太子は其れは生死の法であつて、眞實の道でないと云ふことを說いて、彼等の說く處を破つて一言もなからしめ、ウイカショウの處を去つた。

太子は次第〳〵に進んで、アラーラ仙人の處に行つた。

此のアラーラ仙人と云ふ人は、サーンタヤ派の學者であつて、佛典に數論外道と云ふ一派の大家である。弟子は三百人餘りもあつて、此の國第一の道に達した人と云はれ、智慧德行ともに其の當時に名高く、マカダ國の貴きも賤きも深く此の人を尊敬して居た、であるから勿論高遠な思想を持て居た。太子が敎を受くるのは無益ではなかつた。仙人の弟子達は或ひは山林溪谷に、或ひは樹下石上に思ひ〳〵の所で、難行を

怠りなくやつて居るやうに見えた。

アラーラ仙人は太子の容貌が世の常の人とは異つて、何所か神々しい處が見えるのを歎んで云ふた。

「ア、、お前さんは必然大な道を成し遂げる人に相違ないと思ふ、昔明勝王は其の位を捨てゝ敎を求めたけれど、迚も貴方が年が未だ若いにも係はらず、其の樣に信念の固いのに及ばぬのである。若い血氣盛んの頃は、種々の慾を恣にし、體の力が衰へてから俄かに世の榮えを捨て道を學ぶ者は、普通の人間である。今や貴方は青春の齡を以て、富貴に惑はされぬと云ふのは、實に珍らしい事である、實に賞むべき事である。務めて道のために進んで、決して退くやうなことがあつてはなりません」

と志を勵ますやうに云つた。太子は心潛かに自分を知つて呉れた仙人の言葉を喜んで、諸弟子と共に仙人の敎を聞た、そして五六ヶ月も留まつて居た。

或る日太子はアラーラ仙人に、生老病死の四ッの苦を斷つ法を尋ねた。アラーラは

靜かに其の敎を說き示した。

「人間の心には冥初と云ふ迷ひの源がある、其れから次第に貪ると云ふ念、ねたむと云ふ念が生じて來る、此の煩惱が生じて始めて生きたい、老ひたくない、病に掛りたくない、死にたくない、と云ふ四ッの苦しみが出來て來るので、生老病死の源を斷うと思ふならば、出家をして行爲を正しくし、靜かなる處で禪定を修行するのが必要である。禪定に八ッの階段がある、然るに世の學者は第四段を終の點として居るが自分は第八段を以つて最も上の禪定であると思つて居り、是れより解脫の上はないと思つて居る」

太子は徐ろに口を開いて、

「それでは第八段の禪定の境には我意がありませうか、我がなかつたらば木や石と異なる所はない、我があれば執着の心を生じて、充分解脫の處まで達することが出來ぬではありませんか」

「ナア其れは……」

流石のアラーラ仙人も太子の此の問ひには、グット返答に詰つて、何とも答へる事が出來なかつた。仙人は太子の智慧の深いのに感歎した。

其處で太子は最早學ぶところもないと思つて、アラーラ仙人に別れをつげて、ウドラ仙人を訪ふた。

ウドラ仙人の父は、ラマと云ふ一派の學者で、弟子も多かつた。ラマが死ぬると共に、ウドラ仙人が諸弟子に推されて後を繼いだ、弟子七百人餘りもあつた。太子はウドラの道に就て問ふたけれど、その答へる處はアラーラと殆んど差違がなかつたから暫らくにして此處を辭した。

太子はツラ〳〵思ふに、眞の解脱の法は是等の學者に從ふて居ては迚も得られぬから、自ら考へを積んで解脱の法を得なければならぬと思つた。

そこでニレンゼン河の東の岸に行き正覺山に登つたが、谷の響きが始終に起るので

騒がしくて靜に考へることが出來なかつたから、河を渡つてウルキルヴ村に至り、林の中で苦行をしたのである。

ウルキルヴの中に棲んで居る五人の比丘があつた。太子は是等の比丘の佛につかへる法を見て、情慾を抑へて、行ひを正しくし、沈默して靜かに考へ、如何にも感心な人々のやうに思はれた。

太子も其の中に交つて、一所に冥想をする事にした。五人の者も太子の道を求める志の厚いのを知つて、心を盡し禮を卑くして、お師匠樣と尊めたのである。

太子は只管心を清うして、戒めを守つて怠らなかつた。五人の比丘は何れも苦行をしては人に敗けぬ人々であつたが、迚も太子には及ばなかつた。

さる程に太子は五人の人々とともに苦行を續ける事が六年の長い間であつた。其の間花咲き花落ち、鐵を溶す暑き日も寒風膚を裂く寒き日も、太子の心の動ぬことは山のやうであつた。

難行が次第に進んで、終には一日に一粒の胡麻を食ふて身體を支へるやうになつた血も肉も乾し涸れて、形はさながら枯木のやうになつた。併し生死の境を超へて、悟りを開き、道を成さうと云ふ志は、少しも息む時はなかつたのである、嗚呼實に大なる努力ではないか。

太子の風評は國の中に傳はつて、貴きも賤しきも男も女も、太子を見んとて來る者はひきもきらぬ有樣であつた。太子は坐つて動かぬ事山の如く、目を冥いで考に耽つた。颯々と吹き來る山風は太子の衣を吹いて髮は亂れた。けれど太子は死せるが如く關せなかつた。

斯くのごとく苦行をしたが、哀しい事には安心は尙ほ太子の心に來らぬのであつたそこで太子は猛然として考へた。

苦行にして道を成さんとするは愚なることである、自ら原因を修めて、其の結果を享くるのである。心の淨く靜かであることこそ此の上もない正しい道であらふ、自ら

飲食を絕つて、徒らに身體を損ずるやうな事では、何うして解脫の眞因となる事が出來やうぞ、我れは既に六年の苦行を成し終つた。此の上苦行すれば後は死ぬより外に仕方はないのである、斯くの如く苦行して、安心を得たかと云ふに、決してさうではない、依然として心は亂れて居るのである、然らば如何にすべきぞ。然り飲食を取つて、體力を强うし、更に大なる勇氣を起さねばならぬ、大いに突進せねばならぬ、涅槃は智惠の力に由つて求め得られるのであつて、苦行して餓える共何等の價値が無いのである」

太子は斯く心を決めたのである。其所でまづニレンゼン河の水にて身體を淸めた、けれど如何に氣の確な太子も長き間斷食をした爲に、全く疲勞して居たから、自分を支へる力もなく、ヨロ〳〵として漸くに樹の枝に縋つて岸に上つたが、其の儘バッタリと死んだやうに其處へ仆れて了つた。

其の時に此の森の近くに住んで、牛を飼ふ者の長をして居る人の娘で、名をナンダ

と云ふのが、此の河邊を通り掛つたのであつた。

娘は太子が仆れて居るのを見て、恭しく太子の足に首を垂れて、香ひよき乳を鉢の中に入れて捧げたのである。

「もし、貴き御僧よ、これをお飲みなされませ」

と鈴をならす樣な聲で云ふた、スルと太子は氣がついて、

「これは〳〵有り難う御座る」

と娘の好意を喜んで飲みほすと、忽ち元氣が回復して、身體は俄かに光を增したやうに感じられた。

五人の者は遙かに此の有樣を見て、

「お師匠樣はもうだめぢや」

「ア、ゝ、お師匠樣とも菩薩さまとも思つて居たのに何うした事ぢや」

「到頭苦行が嫌になつたか」

「自分の身體が穢しうなつたか」

「えゝもうお師匠でも何でもないわ」

と口々に罵しつて、太子が河に浴したり、食を求めたりしたので、道心が退いたのだと思つた、太子の眞意を悟ることが出來ず、却つて惡くとつて彼等は、太子を捨て置いて去つたのである。

太子は弟子が自分を捨てゝ去つたのを見て、

「まだ迷ひが悟れないのか、彼等は苦行さへしたら好いと思ふのぢやらう、到頭私を捨てゝ了つた、可哀想な事ぢやが仕方がない、其の内に迷ひのさめる事もあらう」

太子は北に進んでカヤに向ふた、その途中で吉祥に遇ふた。此の者は農夫で草を刈つて居たから、軟かい草を八束貰つてビッバラ樹の下に入つた。

太子は彼の貰つた草を樹の下の金剛座に布いて、深く考へに沈んだ。

「自分が道を成す事が出來なかつたら、死しても此の座は立たぬ」

と決心したのである。ピッパラ樹は釋迦が此樹の下で成道したから菩提樹と云ふのである。

太子が退いた菩提樹の下は誠に靜にして思ふには適した處であつた。地は廣く平であつて、軟かき草が生え茂つて居た。菩提樹の綠の葉は上を蔽ふて、黃白の枝や幹は傍らを廻つて居るのである、鳥は來て樹の枝で美しき聲にて啼るのである。此の樣な樂しき樹の下で太子は結跏趺座したのである。

太子は六年が間苦行して殆ど死に垂してから、再び生に復したのであるから、此の時太子の宗敎上の考へが非常に進んだのである。誰れでも平穩無事なる時は、中中我執が去らぬものであるので、太子の如きも大いに道を得るに到つたのは生死の岐路に立つた時からである。

斯くて太子は此の菩提樹の下で思ひに耽る事によつて、大本願の滿さるゝ日は漸くに近づいたのである。今まで暗の中にあつたのが、俄かに光明に接したのである。

そこで天地に目出度兆があらはれ、三十六天の諸々の佛は皆大いに喜んだ。併し欲界の大魔王丈は獨り大いに喜ばぬのであつた。

抑々菩提樹と云ふのは諸佛成道宿緣のめでたき樹である。魔王は始め太子を其の下に座らしては不可ぬと思ふて、太子が此處へ來ない前に惡い者等を遣はして其の地を占領しやうとした。けれど此の菩提樹を守護する善なる神の爲に退けられたのであつた。

魔王はそこで一の策を考へ出して、自ら姿を變じて、カピラ國の戰士と見せかけて、そして髮を振り亂し、戰亂の中から逃げて來た樣な狀をして、太子に近づいて云ふには、

「太子樣、大變で御座りまする、逆臣が既に王位を奪ひまして、貴方の后妃を自分の者に致しました。その上スッドーナ大王を獄舍に繫ぎました」

と云ふて、證據品として親戚から太子に宛た手紙を見せた、が太子は落着いて少し

も騒がなかつた。容貌は調刻してあるものゝ様に少しも變らぬのであつた。

魔王は今度は方法を變て、魔王の三人の娘を遣はした。そして色を以て太子を動かさうとしたのであつた。けれど太子は何うしても動くやうな者ではなかつた。三人の女は化粧を施し、美しく着飾つて菩提樹の下に行つた。そして舞ふやら唱ふやらして只管太子を動かさうとしたけれど、太子は傍に人がないやうに知らぬ顔をして居た。

第二の計畫も駄目であつたから、魔王は愈々怒つて、惡鬼、餓鬼、修羅、夜叉、羅刹等の一切の眷屬を擧げて、太子の道を修めて居るのを妨げした。

こゝで魔界の惡いもの共は種々の怪しい姿や、様々な奇な形を盡して、菩提樹の下に集まつて來た。或る者は空に黑雲を起し、或る者は大雨、大風、大雹を降らしたり吹かしたりした、全身から火焔を發して居る者がある、一身で澤山の頭のある者がある、一ッ目の者があると思ふと五ッも六ッも目のある者がある、顏が半分白くして半分赤い者がある、猪の身體で馬の頭をして居る者がある、大きな腹で長い身體の者が

ある。其の他實に種々雜多の怪しい者が太子の周圍で吼えたり、躍つたり、飛びまはつたりするのである。

けれど太子は如何なる者が來るとも少しも驚かないので、默つて子供が遊んで居るかの様に思つて見て居た。こゝに於て彼等は如何ともする事が出來なかつたのである

太子は靜かに右手を伸して地を指すと、掌の中から日月の如き光を發し、大聲を上げて魔軍を叱りつけると、天地は俄かに震ひ動いて魔軍は何處ともなく散り〳〵に散つて了つた。

今まで暗憺として居た空は晴れ渡つて日光は輝き出で、諸々の神の歡びの聲が妙なる音樂となつて響いて來た。

魔軍は去つた、暴風の如くに去つた。太子は靜かに思ひを凝して、悟の道に進んだのである。太子の今の心は一點の汚れもなく、玲瓏たることは、赤兒のそれのやうであつた。大なる宇宙の妙機を捉へる事が出來て、今は生も死も流轉も何者も心に掛る

事は無いやうになつた。情は一切の煩悶から離れ、智は一切の妙理を感じて、身體は天地に充塞したのである。

嗚呼斯の如くにして太子は、一生の本願は達して佛陀となつたのである。

太子は菩提樹下の金剛座に端座して、思ひを凝し終に悟りを開いて佛陀となつたと云ふ、傳說によると、いろ〳〵荒唐無稽なることがある。此等は固より信ずるに足らぬとして、敎門には此等の魔軍を十に區別し、魔王の三女の名も明記してある。

第一魔軍は、貪欲軍、第二魔軍は不平軍、第三は飢渴軍、第四は愛着軍、第五は怠慢軍、第六は怖恐軍、第七は疑惑軍、第八は虛飾軍、第九は名利軍、第十は驕慢軍の十軍である。ツマリ人間の十の弱點をあげて、魔軍の名稱として居る所を見ると、此等を敷衍して、いろ〳〵の物語をつくつたものであることが知れる。

此等の魔軍を一々記すのは、面白くもあり、又た有益なることと思ふのであるが、餘り長くなるから、すべて略することとし。太子は此等の弱點なき人卽ち佛陀となつ

たと了解すれば足りる。

又た魔王の三女は、染欲（よくに導く女）能悅人（よく人を悅ばす女）可愛樂（愛すべき樂を彈ずる女）としてあるから、前の十の魔軍と同じ意味で、太子が深思しつつある間に起つた、心的狀態を名に現したものである。

太子が六年の久しきにわたり、苦行を重ね、アラーラ仙人のために、辛き目にあはされたる傳說もあるが、此等の傳說を全部記すことは玆には省く。

彼が殆んど死に瀕するに至り、尙ほ多年の苦心其の効なく、死の狀態より再び生に復せんとする瞬間に於て、釋迦の精神を一轉したといふことは、決して無稽の傳說ではないと思はれる。

世間に行はれる催眠術である、一見不可思議のやうではあるが、心理學上から見れば、決して不可思議ではない、ツマリ人間の夢心地を利用し、覺めて居る狀態と、眠つてゐる狀態とが半々になつた瞬間の働きを指して催眠術的働作といふごとく、そし

て此の動作のために、人の病が治することあるは、しば〳〵人々が目擊するごとく、夢よりも大なる死の瞬間に於て、彼は一女子のために救はれ、生命の健全にして平穩なる時は、敢て重大視せざることを、殆んど失はんとする場合に於て、忽ち大に價値あることを覺り得て、釋迦畢生の宗教的觀念を生じたものであらう。

理論は大略して、太子はいよ〳〵悟道に入り佛陀となつた。これより佛陀は、布教のために其の一身を委ぬるのである。

元來釋迦が、最初より解脫せんとしたものは、老、苦、病、死、或は生、死、病、老とも云ふ）の根本を絕滅せんとするにあつたので、此の點について熟慮し、終に生死、老、病の依て來る原因を發見し、これを除けば疑問はなくなつて了ふ譯であつた

佛陀は、あらゆる世間の苦痛は、因果の關係から來てゐる、無明が世界の初めである。無明から色相起り、色相から意識起り、意識より嗜慾起り、嗜慾より繫縛起り、繫縛より轉化となり、轉化より生を來たし、生あつて茲に悲哀あり、病あり、老あり

絕望あり、死ある所以である。

だからして此等の苦を除き去んと思へば、第一の根抵を除けば、一切の苦源を去ることが能る。云ひ換ふれば、無明を滅すれば色相がなくなる、色相がなくなれば意識がなくなる、斯くして生が滅すれば、悲哀もなければ、病もなく、老もなく、死もないことゝなる。

故に苦の本源を除けば、解脫を得て佛陀たることを得るといふ根抵を定め、此の根本たる無明を斷滅し得ると悟つたのが佛道をなしたる所以である。だからして佛陀は生なければ死なし、生なければ苦なしといふ簡單なる原理に基き、生死の外に超然たるのが覺者卽ち佛陀であると說いた。

彼は三十五歲にして此の原理を悟り、自ら悟りし原理を以て世を救はんとしたので其の敎ゆる所は、自ら之れを實行し、其の行ふところは其の悟りし所に悖らず、終によく世界に師たる器となつた。が、元來彼が道を修めんとしたのは、自己のためでな

くして、廣く世間の人々を救はんがためであつたから、彼は其の道を悟り得ると共に直ちに布敎の道に進むことゝなつた。

佛陀が眞理を覺つた要點は已に記した。眞理は固より一ッであるが、彼が布敎し說法したる所は、これを眞俗二諦に別ち、一は學識高きものに向つて說き、他は蒙昧無學なるものに向つて說いたのである。

眞俗二諦より、二門に分れ、十數宗に岐れ、幾十派に別れたるは、各々聞く人が千差萬別なるにより、其の說く所も從つて種々に變化したのであつた。が、玆に敎法の細末にわたつて說くことは能ないから、たゞ其の大要を記したまでに止める。

佛陀は（太子は覺りを開いてから佛陀と稱した）いよ〳〵衆生濟度の心を決してから、先づ第一にアラーラ仙人を說んとした、が、彼は已に此の世を去つて居たので、バカ仙人を說んとしたが、彼も又た死んで居た。

是に於て先きに苦行林で別れた、彼の五人の比丘を說んと思ひ、彼等が住めるベナ

レース國に赴いた。佛陀は途中茂りたる林があつたから、其所に座禪を組んで居るとたま〳〵五百人ばかりの商人が、北天竺の方から來た。

この商隊の主なるものは、ティリフシャ、バリカの二人であつた。二人は佛陀が靜座するを見て、之れに食物を與へた。彼は鉢を以て之れを受け、之れを食し了りて法を說いた。二人は佛陀の說の尊きに歸依した。

佛陀は、それより道を進む內に、ウバカといふ外道に逢つた、ウバカは佛陀の容貌を見て、其の尋常ならぬに驚き、傍近く進み來たり、

「貴僧は何れのお方なりや」

と鄭寧に聞いた。

「我は一定の住所なし、天地はすべて我が住宅である、行くとして我が家ならざるはなきぞ」

と、佛陀は嚴然として答へた。

「世間の衆生は皆な情欲のために苦しみ、外物のために惑ふ、然るに貴僧は此等の煩惱を解脱せられたるごとく見へる、如何なる教へを奉じて、何人を師とせらるゝのでござる」

「我は師なし、我は自ら悟り、悟りたる道を以て魔王を降伏させ、今や天下萬民を救はんとするものである」

ウバカは、師なくして自ら悟るとは解せられない、表面を飾る惡魔かも知れないと思ひ、深く法を聞かないで立ち去つた。

佛陀は其れより時ほ道を進み、アジャパラ樹下に往つた。その時日已に暮れ、此の樹中に野宿したスルと風雨俄かに起り、樹枝動搖して騷がしく、樹下に彷徨することが能なかつた。其の時龍種族の君長たる、モクレンダといふ人が來て、佛陀を護り風雨蟲害を防ぎ、七日の長きに及んだ。

此の時の事を、俗は龍宮から龍王が來て、釋迦の身體を繞り、風雨をふせいだと傳

へて居る。けれど龍宮から來た蛇の貌をした龍が彼の身體を纏ふたのではなく、モクレンリンダ龍王といふ人が、雨風をふせいで呉れたのである。たゞ、龍王といふだけの文字を誤り傳へたらしく思はれる。

佛陀は、それより前進して、ベナレース國ムリガダヴといふ所へ來た。此所には彼の五人の比丘が居るので、先づ彼等を說んとするのであつた。

が、此等の五人は、嘗て彼が河に浴し女より乳糜（粥のごときもの）を受けたから道心全く衰へ、俗界へ墮落したものと思ひ、早くより佛陀を輕んじて居たのである。だからして今佛陀が近づき來るを見て、

「向ふを見られよ、彼は嘗て難行に堪へずして、俗界に墮落したものではござらぬか」

「如何にも其れに相違ござらぬ、アノ肉附を見られよ」

「誠によく肥つて居る、全く修行を捨てゝ了つたと見へる」

「アノ色のよいこと、俗人と少しも變らぬでは御座らぬか」

「全く俗界の塵に汚れたに相違ござらぬ」

「併し何のために我等の所へ來たのであらう」

「よし我等に近づくとも、彼は誓を破り、苦行を捨て、五欲に歸りたるもの、師事するは扨置き、口一つ利いてはなりませぬぞ」

五人の比丘等は、互ひに佛陀を罵しり、佛陀來るとも、決して口を利かず、座もゆづるまいと決心して居たのである。已にして佛陀は近づき來り、

「汝等覺道し得たるか」

と言葉嚴かに云つた。

五人のもの等は、思はず其の威に打れ各々立つて座より起立し、

「喬答摩には恙あらせられざりしか、我等御健康の體を拜し、恐悅の至りに存ずる」

と、互ひに誓ひを破つて、口を利くのみならず、佛陀を敬禮するのであつた。佛陀の身よりは光明輝き、彼等は正視する能はず、自然に尊敬の念を生じたのである。

なれども彼等は、尙佛陀とは、彼等が六年の間、共に修行しつゝありし當時の名喬答摩を以て呼んだ、佛陀は之れを面白からず思ひ、

「人の子であつて、其の父の名を呼んで宜いか」

と訊いた。

「人の子が其の父の名を呼ぶごときは不倫の始めである、不孝此れより甚だしいことはない」

と、五人の比丘は口を揃へて答へた。

「人の子が其の父の名を呼ぶすら不可なることを知る、然るに汝等は、一切衆生の父たる我が名を呼ぶは、如何なる理由であるか」

佛陀が斯く云ふたので、五人の比丘は一語を發することが能なかつた。各々慚愧の色を現はし、

「我等皆な愚昧にして、智惠なゝものである。佛陀たるおん身の名を呼ぶことの惡か

りしを覺らなかつた、將來再び名を呼ばず、又た何事も佛陀の御指圖に背きませぬ」

答へて、其れよりは佛陀のために、使役の勞に服し、悅んで彼の敎を聞かんことを希ふのであつた。

佛陀は、こゝに於て彼等に向つて、苦行によつて解脫し得られざることを說論した

「身體に樂あれば、こゝに種々の情慾が起り、身體に苦あれば、こゝに神心は錯亂する。樂にして悟道し得られざれば苦も又た悟を開く道ではない。故に覺の道に入らうと思へば、苦なき樂なき中道に居らねばならぬ、苦と樂とを捨てゝ玆に心體共に靜かなることを得、身心共に靜かなれば、玆に八道（正見、正思、正語、正業、正命、正精進、正念、正定）を修め、四苦（生、老、病、死）の苦を除くことができる。我は斯く悟を開いて佛陀となつたのである」

五人の比丘等は、この言葉を聞き、心に大に悅んだ。けれど斯んな言葉は、彼等が尊ぶところの法典の內になかつた。彼等は暫らく不思議の思ひをなし其の首を傾けて

居たが、やがて佛陀の溫容を見あげて、

「吾等智慧少くして佛陀の言葉を考ふるに、何れの法典より出しことを知ることが能ない、願はくは委しく說諭したまはれよ」

「我が云ふところは古來の法典にはない、古來の法典によれば、苦行すれば解脫し得られるごとく說いてある。けれど此れ樂を捨てることを知つて、苦を捨てることを知らないものと云ふべきである。寒、熱、飢、渴の難行を行はなくも、此等苦行を樂と同じく捨てゝこそ始めて悟の道に入るべきものなることを自ら覺つたのである。苦を行ふものは樂を行ふものと同じく、共に覺道に入ること能はざる外道であるぞ」

五人の比丘は、佛陀の言葉を聞き、非常に感動した。佛陀は彼等が道を聞くべき善性あることを見、尙ほ言葉を盡して說聞かせた。

「世の中の不淨なものは、肉を食ふことではなくして、五慾に執着することを云ふのである。故に五慾に離れさへすれば、肉を食つても不淨にはならない、必らず形に

捕はれ、眞理を忘れぬやうにいたせよ、汝等四諦の眞理を知るか」

「我等愚にして未だ四諦の道を覺り得ませぬ、願はくは佛陀の垂教によつて、これを諭したまへ」

と云つて、五人の比丘等は、耳を澄して、佛陀の說を聞かんとするのであつた。

佛陀は、溫容を示し、言葉を和らげ、徐ろに四諦の說話を始めた。

「四諦とは煩惱をほろぼし、涅槃に達するの道である。

第一を苦とし、人は苦に始まつて苦に終る、生、老、病、死、いづれも苦でないものはない。人は憎むべきものとも結ばねばならず、愛すべきものとも離れねばならぬ榮枯盛衰いづれも意のごとくならざる苦惱である。だから現世を苦界と見るのが悟の初めである。

二、苦の因……苦の根本は五慾である。美き味は我を誘ひ、美き聲は我を陷いれ、利を得んことを願ひ、名を求めんことに焦慮し、色、聲、香、味、觸の五慾は、泡沫

夢幻の世樂に執着し、死に到るまで覺ることが能ない、故に現世を苦界と見るは、其の因たる五慾に存することを認めること。

三、苦の滅……苦の因たる五慾を滅せんとするには、我を滅せねばならぬ、一切の望み、一切の執着、我ありて初めて生ず、我は五慾の塊である、煩惱の源である、故に我をほろぼせば一切の苦は滅して了ふ。

四、苦を滅するの八道……八道は已に前に記したごとくである。

故に涅槃の道に入らうと思へば、八道を修めるのが肝要である」

五人は、ます〳〵佛陀の云ふことを信じ且つ敬し、八道について委しく敎を垂れんことを求めた。

佛陀は八道について、大要左の如くに說いた。

一、正見……物事を觀察することが正しいのをいふ。

二、正思惟……意を決するに正しきこと。

三、正語……人に話すに正しきこと。
四、正業……行ひの正しきことを云ふ。
五、正命……生業を營むことの正しきを云ふ。
六、正精進……佛道に勤め行ふことが正しきことをいふ。
七、正念……思想の正しきことを云ふ。
八、正心……安心立命の地の正しきこと。

右の八道を守れば、自から道を學び、救ひを得て、求めんと欲するもの、意の如くならざるなく、こゝに人は苦なき界に達することが能るのである。佛陀の說く所百萬言なるも、其の要は此の八道を守る外に道はきことを示した。

又た佛陀は、此等八道の眞理を說きたる後、說教所、寺院の必要を說き、「道を修むるものが、互ひに想ひ〳〵の所にあれば、或は誘惑に陷ることがある。故は道を修めんとする人々は、おの〳〵相集まり、一團となりて互に戒飾せねばならぬ」

と云つた。

五人の比丘の中に、コーンチンヤといふものがあつた。第一に佛陀の敎を會得し、佛陀の弟子となつたのである。彼につゝいで他の四人も、共に三歸戒を誓つた。

三歸戒といふのは。一、佛に歸依すること。二、法に歸依すること。三、僧に歸依することである。

コーンチンヤ等五人の比丘を始めとし、佛陀の福音に接せんとするもの漸く多くなり、日毎に其の數を增すのであつた。佛陀は、ムリガダヴにあつて、說法を聞くものは其の種類を選ばなかつた。老たるものも、若きものも、男も女も、貴族も平民も、俗なるものも俗ならざるものも、學あるものも無學なるものも、一切何等の區別をおかず、熱心に敎化するのであつた。

此の時、ベナーレス國の貴族の子に、ヤシャと云ふものがあつた。人生の苦痛を感じムリガダヴに來り、佛陀の說法を聞き、忽ち敎化せられて沙門となつた。彼の父も

佛陀の說敎を聞き、同じく敎化せられて沙門となつた。彼等二人を第一のウパソクと云つた。

ウパソクといふのは、家にあつて世務を行ひ、佛敎に歸依せる男子の信者であつて僧象の結合に入らないものを稱する名である。

ヤシヤの母や妻も、又た敎化せられて三寶に歸依した。彼等第一のウパイと云つた

ウパイといふは、在家の信者を稱するのである。

ペナーレス城に、ヤシヤの友達が五十人あつた。何れも貴族の子であつたが、ヤシヤが出家したことを聞き、ヤシヤに傚つて、こゝく佛敎に歸依して、ウパソクとなり、斯くて佛陀の弟子は次第に其の數を增し、ムリガダヴに來てから三ケ月の間に五十六人の沙門が出來たので、佛陀は此等の人々に向ひ、

「各々我が敎を信じ、奇特の至りである、が、我が敎は、獨り私することは能ないこれを天下に傳へ、廣く民衆を救ふのが本意である。故に各々は各地に別れ進み、我

が敎を以て、懇切に民衆を敎化せよ」

と命ぜられたので、人々は皆な此地を去つて、各方面に別れて布敎に從事し、佛陀も自らは、マカダ國ラジヤグリハ城に向ひ、ヤシヤ一人を止めて、ムリガダヴ附近を敎化させた。

佛陀が、ムリガダヴ附近に居た時は、天氣のよき日には、出でゝ遠近に托鉢修行をなし、降雨の日には、內にあつて道を修めるのであつた。

佛陀が家にある一日は、之れを五ツに分ち。一、拂曉に早く起きて洗漱を終るや、衣をつけて禪室に入り、觀想を了りて袈裟をつけ、托鉢乞ひをする。二、托鉢が了るや、足を洗つて堂に上り弟子を集めて法義を說く。法義了るや、弟子達は、或は討論をなし、或は疑義を正し、或は靜座して佛陀の敎を仰ぎ、佛陀は此間に食事を畢り、午後になつて四方から集り來る人々に對し敎法を說くのである。三、衆民に對する法話が了ると、佛陀は林の中を散步し、歸り來つて弟子達の質疑に答へる。四、日沒後

は、諸天の善神のために法を説き、今の午後十時になるまで之れを行なふ。五、善神に對する説法が了ると、眠りにつき、其の眠るや北を枕にして頭を冷し、南に足をのべて之れを溫め、西に面して胃の口を下にして消化を妨げないやうにされた。

佛陀は、マカダ國の、ラジャグリハ城に至る途中に於て、ガジャセンといふ山に上つた。この山にはウルキルワー・カーシャーバ、ナラー・カーシャーバ、ガヤー・カーシャーバといふ三人の兄弟が住んでゐた。そして此の三人は、苦行をする仙人であつて、其の德高く學博く、マカダ國の人民は何れも彼等を信じてゐるのであつた。

彼等の信ずる宗敎は、恰かもペルシャ國の人民が火を信ずるごとく、神火に事へて居た。そして此等の三人は、何れも其の居を異にし、兄のウルキルワー・カーシャーバには、五百人の弟子があり、中兄のナラー・カーシャーバには三百人の弟子あり、弟のガヤー・カーシャーバには二百人の弟子があつた。

佛陀は、彼等三人の名聲を聞きて居るので、先づ此等三人の兄弟を説かんとして、

一日の夕暮に、ウルキルワー・カーシャーバの住居をたづねた。

火を信ずる宗敎は、古代に於て盛んに行はれたものである。何故に火が生ずるかの原因が別らないから、たゞ畏れて之れを信ずるのであつた。

佛陀は、ウルキルワー・カーシャーバを説いて彼の八道を行ふの正理なることを演べた。が、彼は佛陀よりは年上であつて、佛陀を年少の沙門なりと侮どり、固く自己の敎義を主張して、容易に佛陀の説に伏しなかつた。

既にして夜に入り、餘程時刻も移つたので、佛陀は討論を翌日にのばし、其夜彼の家に泊らんとした。

カーシャーバは、佛陀と激しく議論して、稍激して居たから、佛陀を困らせんとして

「我に一ツの火窟あるのみで、お泊め申す場所がない」

と云つて、宿を謝絶らんとした。

「火窟があれば結構である、其所にて暫らく休ませて貰はう」

「まだ御存じないと見えるが、火窟には惡龍が棲み居るので、おん身が宿られる所ではない」

「惡龍たりとも怖るゝに及ばぬ、世に正法に敵するものはない、苦しうないからお泊め下されい」

これにはカーシャーバも驚いた、惡龍の棲む火窟へ泊ると云はれては泊めない譯に往かない、

「然らばお心任せに致されよ」

と云つて、弟子に命じて佛陀を火窟へ案内させた。

佛陀は自ら進んで人の嫌がる火窟内へ宿つた。常に人の入つたことのなき所に人が來たから、惡龍は佛陀の姿を見るや大に怒り、眼を瞋らして今にも飛びかゝん勢をしめすのであつた。

が、佛陀は更に驚くことなく、端座したまゝ少しも動かなかつた。已にして夜は次第に深くなり、世の中はシーンとして物淋しくなつた。

惡龍は、時分はよしと、毒烟を放ち、洞窟内は火炎も以て蔽はれた、が火炎は少しも佛陀の身にふるゝことなく、彼に近づくや火炎は自から消えるので、佛陀は顏色常のごとく、端座したまゝ温容を以て惡龍を見まもつて居た。

惡龍は佛陀の德に敵しがたく、終に其の罪を謝するものゝ如く、彼の前に來つて、猫のごとく柔しくうづくまつて首を垂れた、佛陀は之れを憐れみ、自ら捕へて鉢の中へ入れた。

已にしてカーシャーバは、眞夜火窟内に火が起つたから、佛陀が自ら計らずして、無鐵砲にも火窟内へ宿つた罰で、多分佛陀は龍火のために死んだものと思ひ、翌朝になつて一人の弟子を呼よせ、

「昨夜の年若き沙門は、アノ火窟内へ宿つたが、多分灰になつて居るであらう、急いで見屆け參れ」

「畏りました」

師の命により、可哀さうなものぢや、と獨言しながら、彼の弟子は火窟の側近くまで進んだ。

佛陀は進み來る、カーシャーバの弟子を招き、

「オ、御苦勞であつた、定めて心配いたしたらう」

「おん身は御無事でござつたか、アノ昨夜の龍火が……」

と云つたまゝ口を開かず、茫然として立止つた。

「驚くことはない、サア近く寄れよ、惡龍は已に我に降伏して此の鉢の中にあり」

佛陀は彼（）惡龍を入れたる鉢を彼の弟子に見せた。

惡龍が猫の子の如く柔順しくして居るのを見て、弟子はます〳〵驚き、其の儘急いで師の許へ歸つた。

「お師匠さま申上げます」

「オ、何ういたした、餘程顏の色が意いやうぢや、餘程無慘な死樣をしたものと見へるな」

「何うも不思議な事があるものでございます」

「不思議といふは」

「不思議といふは、アノ年若き沙門はたゞの人間とは思はれませぬ」

「其れは何ういふ譯だ」

「アノ昨夜の龍火、大低のものなら灰になつて居る譯ですが、彼は平氣で何の障りもないのです」

「エッ、アノ龍火に生命を完うしてゐるとは……」

と云つて、カーシャーバは暫らく腕組をして居たが、やがて弟子に向ひ、

「眞實かい」

「何の詐りを申しませう、其れのみならず未だ不思議な事がございます」と云て眼を

呼つた。

「その上の不思議とは」

「惡龍を降伏させて、それを鉢の中へ入れて居ります」

「サテも不思議な沙門ではある、アノ惡龍を降すとは、さても〳〵怖ろしき沙門であるぞ」

カーシャーバは、いよ〳〵佛陀の學德無邊なるに一驚し、早くも畏敬の念を起した

カーシャーバは、其のまゝ起つて彼の火窟の傍まで往くと、佛陀は端座したまゝ、温容を以て彼を迎へ、

「カーシャーバよ、我は汝が怖るゝ惡龍を降伏させた、龍火などを怖れるやうでは、まだ〳〵其方の修行は足りない、怖るべき理由なき火を怖れ、眞の正法を捨てるとは評判にも似氣なき未熟者であると見へる、此の有樣を見るも、汝は尙ほ我が敎法を信じ、之れに歸依することが能ないか、兎もあれ尙ほ汝に諭すべきことあり、我に從ひ

來れ」と云て佛陀は起上つた。

カーシャーバは佛陀の前に兩手をつかへ、

「斯る尊き功德無邊なるお方とも存ぜず、無禮の數々お許し下されよ、我之れよりお前身を師とし專心修行したく心得まする」

と心の底から恭敬の念を生じた。

佛陀は、カーシャーバが、心の底から恭敬の念を生じ、敎を受くべき性あるを見込み、彼を其の家に伴ひ、こゝに彼の弟子五百人を集め、火に事ふることの云れなきを論じ、彼の四諦八道の眞理を諭した。

人は自ら眞理を發見し得ざるも、二つのものを比べて、其の何れが眞理なるかを判斷することは容易である。カーシャーバの弟子等は、平素カーシャーバから聞く所と今佛陀から聞く所とを比べて火に事ふることの愚なるを覺り、

「アノ若い沙門の說く所は、何の法典にあるんだらう」

「古來の法典にはないのだ、自分で發明したんだよ」
「馬鹿なことを云ふな、神や佛ぢやあるまい、法典を發明すると云ふことがあるか」
「其んな事を云ふから話せない、アノ沙門は人間のやうに見えるが、其の實人間ぢやアないのだ、人間に化けてゐるんだ」
「然うだらう、僕も然う思つてゐたのだ」
「さういへば何だか身體から時々光明が出る、狐が化けると、身體から光の出るといふから、狐めが人間に化けたのかね」
「冗談ぢやアない、狐や狸が、アンナ旨いことが喋舌れるか」
「なるほど狐にしちやア云ふことが旨いと思ふた、何だらう、云ふことだけは、お師匠さんのカーシャーパよりは餘程上手だ」
「さうだ、だからお師匠さんよりか上手のものが化けたのだ、狐や狸ぢやアない」
「狐や狸ぢやアあるまい、惡龍なども畏れて小さくなつてゐる」

「解つた。屹度なめくじが化けたんだ」
「なめくじが化けるなんて、妙なことを云ふね」
「なめくじだつて化けるさ、蟇は蛇にまけ、蛇は蛞蝓に負けると云ふから、惡龍が小さくなつて畏れるやうぢやア蛞蝓が化けたに違ひない」
「蛞蝓がお師匠さんより上手といふことがあるかい」
「だつてお師匠さんは何でも怖がるよ、蛇だつて、火だつて、怖がつて事へて居るんだ、屹度蛞蝓も怖いに違ひなからうよ」
「馬鹿なこと云ふものぢやアない、そんなものが化けるものか」
「其れぢやア何が化けたんだ、蛞蝓の外に惡龍が畏れるものがあるか」
「蛞蝓ではない、惡龍でも何でも、恐らく天地間にありとあらゆる惡魔が總て畏れる善神の化身だ」
「善神？、善神！、それぢやア法典にないことでも發明ができる譯だ、何うも身體か

ら光明が輝くと思つた」

「何うして有難いお方だ、僕はお師匠さんを止めて、此れからはアノ若い沙門について修行しやう」

「なるほど宜い所へ氣がついた、師匠と尊めるなら、斯ういふ人を選ばぬのは間違つてゐる」

「僕も師匠を取換へやう」

「失禮なことをいふな、賴んでお徒弟にして貰ふのぢやないか」

「然うだ、此方で勝手に取換ることは能ない、兎に角君が我々の代表者になつて、宜しくお賴みして呉れたまへ」

と、大勢の弟子達は、早くも佛陀の凡人ならざることを言傳へ、彼の徒弟となつて修行せんとするものが多くなつた。初めより佛陀の說くところに耳を傾け、我を捨て能く其の說く所を味はつて見ると、火に事へるなどいふことは非常に迷つた信念で

ある、と悟り得たる彼のカーシャーバは、茲に隨喜の涙を流し、其の被服および火に事ふる祭具を河に投じ、一鉢一杖の身となり、佛陀に師事せんことを誓つた。

カーシャーバの此の有樣を見て、其の徒弟五百人は、同じく師に倣つて佛陀に從つた。

ナラー、ガヤーの二弟は、何れも河下に住んで居たが、兄ウルキルワーの被服や、火に事ふる祭具などが河に流れ來たるを見て、兄の身に異變が起つたのではないかと非常に心配した。

兄ウルウルワーの被服及び祭具が流れ來るを最初に見たのは、ナラー・カーシャーバであつた。ナラーは、大に驚き弟の、ガヤー・カーシャーバを訪ひ、共に河緣に出で來り、

「何うしたんだらう、斯んなに被服や祭具が流れるのは」

「兄上の身に異變が起つたかと思はれますね」

「惡魔の襲撃でも受けられたか」

「其れにしても五百の徒弟がある兄上、若し異變が起つたとすれば、程遠からぬ此所まで、誰か知らせに來さうなものだと思はれます」

「其の點もある、が、流るゝ衣服や祭具は、此の通り多數である、若し異變があつたとすれば、兄上一人のみではない、五百人全體に關することだ、何にしても斯うして居る場合でない、兎に角急いで樣子を伺はうではないか」

「其れが宜しうございます」

といふので、二人は其のまゝ兄ウルキルワー・カーシャーバの許に駈つけた。三百と二百との徒弟等は、その話を聞傳へ、我も！〳〵と其の師の後を逐ふのであつた。

ナラー・カーシャーバ、及び其の弟子三百人。ガヤー・カーシャーバ。及び其の弟子二百人、合計五百餘人のものが、驚き慌てゝ兄の許へ駈つけて見ると、兄ウルキルワー・カーシャーバ及び其の弟子五百人は佛陀に歸依して之れに師事し、其の被服と祭具流

したことが明瞭になつた。

是に於て、カーシャーバ兄弟は、兄に乞ふて佛陀と論難せんことを求めた。そして佛陀の云ふところが、果して二人が信ずる教法より勝れたる時は、兄に倣つて佛陀に師事せんことを誓つた。

佛陀は、二人の兄弟を引見し、

「我已に汝等の教義を、ウルキルワー・カーシャーバより聞いた、今重ねて汝等より聞く必要はない。が、我が教法は、未だ汝等に語らない、故に我れ今汝等二人及び其の徒弟五百人のために、我が法を解くであらう、汝等之れを聞き、汝等が奉ずる教義と何れが勝れるかは、汝等自身に於て之れを判ぜよ、汝等能く我が說を聞き、其の可否を判じ得るか」

と云つて先づ二人の人を確めた。

二人は、

「謹んでおん身の說く所を謹聽し、我等自身が其の可否を判斷いたしませう」

と答へた。

佛陀は二人に命じて水を運ばせ、自ら手にせる鉢に、之れを充した。

「汝等此の上に尙ほ水を注ぐことができるか」

佛陀が注いだ水は、已に鉢をあふれんばかりである。此の上一滴も注ぎ得られないことを見て、

「我等は此の上一滴も注ぐことはできない、が、おん身は、尙ほ注ぎ得られますか」

と反問した。

佛陀は笑ひながら、

「其れを云ふのではない、此の上注がれぬことが解れば足る。此の器に水を注れぬと同じ道理で、汝等の頭の內に、一バイにものが充て居ては、我が說く所が入らない。我が說く所のものを容れんと思へば、汝等の頭の中を空虛にせねばならぬ。我といふ

ことを捨てゝ了はねば我が千言萬語も、汝等之れを味はうことは能ない、こゝの道理が解つたか」

と云つた。

二人は顏を見合はせて居たが、やがて口を開き、

「よく解りました、我を捨てゝ聽聞いたします」

と答へた。

こゝに於て、佛陀は、彼の四諦八道を說き、人の奉ずべき正道を諭した。二人の兄弟は、此の國に於て智あり德ある賢人と呼れたるものである。その頭腦は敎義の可否を判斷して誤らなかつた。終に佛陀に心服し、約のごとく各々其の徒弟を從へ、佛陀に師事することゝなつた。

佛陀は、こゝに千餘人の徒弟を得、彼等を從へて、セジャグリハ城へ入つた。この國の人々は、かねて佛陀が解脫したことを聞き、其の人に勝れて聰明なることは疑が

はなかつた。けれどマカダ國幾百萬人の尊信し居たる、彼のカーシャーバ三人の兄弟よりも勝れたるものなることは知らなかつた。況して彼等三人が佛陀の弟子となつたなどゝは、夢にも思ふことは能なかつた。

佛陀が、ラジャグリハ城に入るや、此の國の人々は、異樣の眼を睜つて、佛陀及びカーシャーバ三兄弟の姿を見守るのであつた。

「今通られた佛陀といふお方は偉い人ではないか、カーシャーバさんのやうなお方がお弟子になられたといふ話ぢや、兎に角何んな尊い說敎をなさるか、聞きたいものだ」

「何をお前は云てるのだ。お前のいふことは逆樣だ」

「何が逆樣だ」

「佛陀といふ人は、お前がいふ通り偉い人には違ひない、が、カーシャーバさんが弟子になるなんて、そんな事があるものか、佛陀といふのが、カーシャーバさんのお弟子になられたのだ」

「其はお前の方が間違つてる。カーシャーバさんが、佛陀の弟子となり、これまでカーシャーバさんに從つて修行して居た一千人のお弟子達までが、殘らずお弟子になられたのだ」

「そんな事があつて堪るものか、お前は、カーシャーバさんを知らないのか、我がマカダ國が廣いとは云へ、學問と云ひ、行と云ひ、アノお方の右に出る人は一人もないだからジャ山には、常に千人の修行者が欠けたことはないと云ふ位だ」

「其れは分つてる、けれど其の偉いカーシャーバさんよりも、佛陀の方が偉いといふことだ」

「冗談ぢやアない、アの若い佛陀が、カーシャーバさんより偉いといふことがあるものか」

「だつて見なさい、佛陀が先に立つて、カーシャーバさんや其の他のお弟子が恭しくお伴をして居られる、年は若くても悟道に入つて佛になられたのだから仕方がない」

「幾らお前が云ても、そんな事を誰が眞に受けるものか、大概になさい人が笑ふから」
「お前が、そんなに疑ふのなら、これからお伴をして往かう、私が云ふことは間違ひないのだ」
「宜らう、何所までもお伴をして見やう」
ラジャグリハ城の人々は、佛陀が通過ると、何れの場所でも斯んな話をしてゐた。多くの人達は、何うしてもカーシャーパ兄弟が、佛陀の弟子になつたとは信じられなかつたのである。
マカダ國王ビンビサラは、嘗て佛陀に向つて、若し成道せられたならば、願はくは我國に來り、教化せられんことを望むと云つた。故に佛陀は、ビンビサラを說んがために此の國に來たのであつた。
ビンビサラは、佛陀が成道して我國へ來たことを聞き、群臣一族を率ゐ、佛陀が留つて居た杖林といふ所まで出迎へた。所が佛陀の傍に、彼のカーシャーパ三人の兄弟

が居るのを見て、彼は常にカーシャーパを信じ、且つ佛陀が、カーシャーパより年少であつたから、佛陀はカーシャーパに從つて、修行したものだと見誤つた。
だからして國王が、カーシャーパに對するは、佛陀に對するよりも、遙かに禮を厚くした。王に從ひたる群臣等も、又た常に信ずるカーシャーパの事であるから、王と同じ念を起した。
佛陀は、先づビンビサラに向ひ、
「大王よ、我が教法を說く前に、此所にあるカーシャーパが、火に事ふる祭具を捨て、我が教法に從つた理由を聞れよ」
と云つた。
カーシャーパは、佛陀の言葉が終るや否、ビンビサラ王に向ひ、
「我れ今日までは、火に事ふる功德により、天人の內に生れ、無上の樂みを得んことを願つて居たが、たとひ、天人の中に生れても、たゞ煩惱を增すばかりで、已に生あ

りとすれば、必らず老あり、病あり、死あることを免れることは能ない、といふ欠點あるを悟ることが能なかつた。然るに佛陀に會ひ、生、死、老、病の四苦を離れて、眞正の解脱を得べき敎を聞き、こゝに火に事ふる謂れなきを悟り、其の祭具を捨てゝ佛陀に師事することゝなつたのである」

と云つた。

こゝに於て、國王始め群臣より衆人に至るまで、佛陀が、カーシャーバよりも遙かに偉い人だといふことを知つた。

當時マカダ國は、印度第一の强國であつて、文化の度も他國に勝れてゐた。此の國に於て佛敎が傳せらるれば、其の他の國に傳播することは極めて容易なる狀態であつた。

佛陀は、ビンビサラ王に向ひ、

「大王よ、人間の身は、識を以て本とする。識あるが故に意を生じ、意あるが故に色

を生ず、色は生滅して定住しない、今あるも後あることを斷ずることは能ない。則ち身體の無常なることが知られるのである。斯のごとく我が身を觀るときは、我身とは云へ、我が身といふことは能ない。已に我が身であつて我が身でないことを知り、我が物であつて我が物でないことを知らば、こゝに苦あることはなくなる。要は我を去り我を離れるにある。何人にても能く我を去ることができれば、これを解脱といふ。又た此の我を去ることが能なければ、これを繫縛といふのである。眞相を云へば我ある譯はない、畢竟心に迷ひがあるから、謬つて我ありとするのである。解りよく云へば、我が身だといふけれど、我が身ならば何時でも自ら之れを自由に得られなければならぬ筈なるに、無常の風は之を自由にすることを許さぬ。今我が物だと思つて居ても、何時人に奪はれるやら、又た天災地殃のために我が物でなくなるか知れない。故に我が身だとか、我が物だとか思ふのは間違ひであつて、其の實相を觀極むれば、世の中に我が物なるはなき筈である。この迷ふてゐる我といふ思ひを去れば解脱し得

られるのである」

と、佛陀は我が悟り得たる眞相を說いた。ビンビサラ王は、尙ほ之れを解しかねて

「若し一切のものが、我が身なく、我が財なく、我が靈なく、すべて我なるものがないとすれば、今日に於て行つたる報は、誰が受けることになるや」

といふ疑問を發した。

「一切の衆生が、我が行ひたる善惡により、其の果報を受くることは云ふまでもないが、我が作つたといふ譯でもなく、又た我が受くるといふ譯でもない。とは云へ善いことをすれば、善い報をうけ、惡いことをすれば、惡い報ひをうけて居る。こゝに於てか我あるごとく迷ふことになる。凡そ人には情、塵、識といふ三つのものがある。この三つのものが相合して慾となり、慾念が增して來ると物事に執着する。故に人々は生死の境遇にあつて、多くの苦みを受けねばならぬことになる。此の三つのものを去れば、卽ち執着心なくして解脫し得る。三つのものが相合して善惡の所業となり、

又た善惡の果報となるが、別に我なるものが存して居るのではない、譬へて云へば火を鑽るごときもので、手が燧石を打ち火を生ずることが能る、が、火なる性が手から出たのではない。又た燧石のみの力で出たのでもない、と云ふて手と燧石とを離れる譯ではない。情、塵、識も此の如きものである」

「然らば、情、塵、識の三つのものが和合するから、善惡の果報を受けるものとすれば、此の三つのものは相合して分離することはなきや、或は相合せざることなきや」

「この三つのものは、不常不斷である。何となれば、相合するが故に斷絕せず、相離るゝが故に常體では云はれない。譬へば土と水との如きもので、この二つが發育の緣となり、植物の種子が發生の因となり、芽を生ずるが如く、芽を發する時には、種子は已に其の形を失つて居るから、常體であるとは云へない。けれど芽を生ずるのだから、斷絕して了つたと云ふことは能ない。だからして三つのものも之れと同じ譯で、常に分離することは能ないが、合はないからと云つて斷絕したと云ふことは能ない

佛陀と、ビンビサラ王との間には、尙ほ幾多かの問答があつた。王は、佛陀の主旨を解し終に佛陀に歸依することゝなつた。

翌日になつて、ビンビサラ王は、佛陀及び彼に從ふ僧徒を王宮に招き、彼等に飲食を供へ、尙ほ佛陀に竹林を献じ、又た竹林の内に寺院をたてゝ、佛陀が說法する會所とした、世に竹林精舍といふのが此れである。佛陀は此の地に留つて二ケ月の間說法をした。

マカダ國王ビンビサラは、佛陀の成道して歸るや、その脚下に拜し、直ちにバラモンの古法を捨て、佛敎徒となつた。ビンビサラ王は、當時三十に滿たない血氣盛りであつたが、其の後數十年の間彼は熱心なる佛法歸依者として、佛陀および其の弟子を掩護し、布敎のために力を致した。

佛陀は、印度第一の强國たる、マカダ國王ビンビサラの援けを得たるは、佛敎傳播のため、この上もなき便利を得て、よく宗敎の開祖は、執政者のために迫害を受ける

ものであるが、此等の不幸に出逢はなかつたのは、實に此のビンビサラがあつたからである。

ビンビサラの援けを得て、佛陀は當時印度文明の中心たるマカダ國を根據とし、其の敎を四方に傳へた。此の時に當り、マカダ國のナランダといふ所に、二人のバラモンがあつた、何れも聰明にして學識あり、共に二百餘人の弟子を有てゐた。

この一人は、シャーリ、フットラ（舍利弗ともいふ）と云ひ、他をマーウドガラ、フットラ（目犍連とも又た略して目連とも云ふ）と云ひ、共に道場を張り、全盛を極め、人々の尊崇淺からざる尊者であつた。

二人は互に相親しみ、常に眞正の道を求むることに勉めてゐた。この二人は、共に沙然といふ人に學んだ學友であつた。沙然はナランダといふ所に住んでゐた名ある學者であつて、其の弟子達の中で、高弟と呼れたのが、この二人のバラモンであつた。

ンして沙然が死んだ後、この二人は、誰か師事すべき人を求めて居たのである。

此の時に當り、佛陀の弟子の馬勝といふ人が、衣をつけ鉢を持ち、ナランダ村に來て食を求めた。馬勝の擧動は、心安らかにして威儀とゝなひ、更らに俗氣を見ることが能なかつた。

斯く殊勝なる人は、多く見ることが能ない、道行く人も歩みを止めて馬勝を見返るのであつた。たま〳〵シャーリ、フットラは、途上に於て馬勝に出逢つた。

「甚だ失禮でござるが、何れに住つて、御尊名は何と仰せらるゝや」

と、シャーリ、フットラは、思はず敬虔の念を生じたから、斯く云て恭しく一禮した。

「私は名もなき又た一定の住居とてもなき修行の身でござる」

「御謙遜のほど恐れ入ります、お見受け申しますれば、貴僧の擧動といひ、お言葉といひ、世の常ならぬお方と思はれます、何卒御尊名をお明し下されい、斯いふ拙者は沙然の門弟で、シャーリ、フットラといふものでござる」

と言葉を卑くして訊いた。

「拙者は未だ修行中のもので、馬勝といふ名もなきものでござる、御褒めのお言葉を頂き心耻かしく存ずる」

「御修行中と仰せらるゝが、貴僧の師とせられるお方は、何れに住はれ、名は何と仰せらるゝや、實は拙者は師にはなれ、今や善き師匠を求めんと探しつゝあるものでござる、が、貴僧の擧動を見て敬虔の念禁ずる能はず、何卒お師匠の御高名をお聞せ下さい」

「我が師事するところは、カビラ城淨飯王の子、今は悟を得て佛陀となられたるお方でござる」

「其れでこそ能く解りました、竹林に住はるゝ佛陀でござるか、御高名は豫てより聞及び居りますが、未だ敎へを受けないのは殘念の至りに心得ます、して御敎義は如何なる大要でござらうか」

と、フットラは、馬勝の足下に拝跪した。

「佛陀は、一切の全智を得たるお方であるが、我年若く、道を學ぶの日も淺く、充分に師の教義を演べることは能ない。が、其の大要をお話すれば、佛陀の教へは、諸法因によつて生じ、又た因によつて滅す、因なくして法あることなく、この因を説かれるのが、教義でござる」

馬勝は、諸法は生滅を免れることは能ない、本來空にして無我なるが眞理である、此の眞理を悟り得れば、衆苦の外に超然解脱し得られることを話したのである。

シャーリ、フットラは、後に釋迦の門弟中、智慧第一と稱せられるほどあつて、馬勝の話を聞き、直ちに佛陀の教義を悟り、人生の迷霧を看破し、一切の衆生ことく我に執着す、これが故に永く輪廻して生死の間にある所以である。我を離れてこそ日光がよく闇を破るごとく、人生の眞味を解することが能るのであつた。今日まで我が修學しつゝある所は、すべて邪見であつて、眞理正見したものではなかつたといふ

ことを悟つた。

一たび馬勝に逢つて、眞理を正見したシャーリ、フットラは、今までとは異り其の態度自から靜かに其の顏色自から和ぎ、尋常ならざる風姿となつた。マーウドガラフットラは、早くも之を認めた。

「近頃君の樣子は何となく、世情俗態を離れたる如く思はれる、童顏にして少しも苦の影を認める事が能ない、何か悟るところがあつたのではないか」

と、マーウドガラ、フットラは聞いた。

「實は過般馬勝といふ佛陀の弟子に出會ひ、其の教義の大要を聞き、自ら悟るところがあつたのである」

と、シャーリ、フットラは、詳細のことを話した。マーウドガラ、フットラは之れを聞き大に悅び、

「佛陀が新に悟を開いたといふことは豫てより聞く所であつた、が、然し眞理を穿ち

得たるものとは思はなかつた。已に其の敎旨が、眞理の正觀たることを知る上は、一日も早く竹林に至り、敎義の蘊奥を極めねばならぬ」

「固より君の云はるゝ如くである、が、我等には三百餘人の弟子がある、彼等は師沙然が臨終の時に、我等二人に誘導を托された人々である。彼等に告げずして我等二人が此所を去つて佛陀に從ふことは能ないやうに考へられる」

「固より我等二人のみが佛道を私することは能ない、詳しき事情を彼等一同に話し各々其の欲する所に任せるがよからう」

と云ふので、直ちに門弟一同を招き、委細の物語りをした。三百に餘る弟子達は誰去らんといふものなく、ことゞく二人に從つて、佛陀の許に往んことを求めた。

こゝに於て二人は、三百餘人の門弟をつれ、竹林に到り佛陀の敎法を叩いた。佛陀は深切丁寧に彼の四諦八道の法話を聞せたので、此等の人々は、直ちに出家して佛門に入り、こゝに佛陀の門弟は千三百餘人の多きに達した。

又たラジャグリハの城外マカシャダラといふ所に、マハーカー、シャーバと呼ぶ巨萬の富を有するものがあつた。この人は幼い時から學問を好み、經典に通じ、聰明にして學識高く、積める富を散じ、普ねく之れを施こし、常に善行をなすことを悅び、俗世の快樂をたち、家を捨てゝ山林に入り、學問の蘊奥を極めんと志した。

此の時に當り、たまゝ佛陀が竹林に來て、日々法話をなしつゝあることを聞き、佛陀に乞ふて敎をうけた。佛陀はマハーカー、シャーバに向ひ、

「お前が善行をなし、之れに依つて安樂の妙所に達しやうと思へば、內に顧みて自ら愧づるの心を起さねばならぬ、ソして正念を呼起して、須臾の間も此の念を失つてはならぬ。あらゆるものに生滅の免かるべからざることが有りと知らば、我に執着することを止めよ」

と云つた。

これより七日ばかり經つて、シャーバは、佛法を解し、解脫を得て、安樂の域に達

した。彼は後に至つて、釋迦の門弟中第一位に坐し、釋迦の滅後、三藏經を集蒐するに當り其の主任となり、終に大業を完成した。

斯のごとくにして佛敎は次第に廣り、マカダ國の青年等は、爭ふて佛門に入り、身を宗敎に投ずるもの多く、從つて世人は其の前途を悲觀し始めた。

「何うも困つたことが流行し始めたぢやアありませんか、私の枠は家出しましたよ」

「其れはお困りでございませう、私の枠も朝から晩まで說敎にふけり、家のことなどは少しも構ひません」

「子は親を捨てゝ佛門に入り、家僕は主人を捨てゝ佛法に歸す、これでは乞食ばかりが殖へて、正業に從ふものはなくなつて了ひませうよ」

子を失つたる父、家僕を失つたる家主等は、寄合ふごとに佛法の盛りゆくことを憤慨し、佛陀の徒弟が多くなるに從ひ、此等の非難は、ます〳〵其の聲を高めるのであつた。

一日佛弟子の一人が、人々の家に立ち托鉢しつゝあつた。スルと此等不平の徒が集り來り、

「お前の師匠と仰ぐ人は、我等の業務を妨げんがために此國へ來たのだらう、年頃の小供は、お前等のやうに乞食の眞似をし、働き盛りの若者は、主人を捨てゝ佛弟子となり、働らくことを止めてブラ〳〵して、其口を糊することを考へぬ、斯んなことで此の末が何うなると思ふのだ。お氣の毒だが、お前およびお前等の仲間に、これから後は、米一粒だつて與ることは御免だ」

と云つて詈つた、が、比丘は之れに對して答ふることが能なかつた。故に直ちに佛陀の許に歸り來り、ありし事柄を話して敎へを乞ふた。

佛陀は比丘に向つて、

「そんな不平が幾時まで續くものか、お前等は、再び其んな嘲りを受けた時は、佛陀が來たのは、眞の道を傳へんがためである、人々の心を淸くし、其の行ひを正しくし

汝等が尤も畏るゝ惡人を此世から救つてやるのである、涅槃の光を避けて無明の闇を求めるものは、佛の慈悲を知らないからである。死の怖るべきを救ふ心がないからだと說諭せよ」

と云つた。

此等一時の淺見より、佛陀に反對したる人々も、後には心の闇の恐るべきことを覺り、終に佛陀の德化に服し、再び佛陀および其の徒弟を詈るものはなくなつた。

佛陀が、斯く人々の信仰を受くるやうになり、其の名は次第に廣まるにつれ、終にカピラ城内に於て、日夜佛陀を忘れたことなき、老父淨飯王およびヤユダラ姫の耳に入つた。

ヤスダラ姫は、嘗て南柯女のために苦しめられたが、優陀夷大臣及び右梵兒の忠節により、其の身にかゝる疑雲を散じ、養父淨飯王との間に、眞實の親子の如き愛情が溢れ、爾來其の日〳〵を安樂に暮して居た、が、悉達太子の行末が判らないので、た

だ其の事ばかりを苦に病んで居た。

淨飯王も、悉達太子の消息が、七年の長きに亘り知ることが能なかつたから、ヤヌダラ姫が、年若くして寡婦なるを憐み、此れまでに幾度となく、人を以て姫に再婚を勸めた、が、ヤスダラ姫は、

「妾は悉達太子の妻である」

と、たゞ一言に刎つけて了ふのが常であつた。

斯る時に當り、悉達太子が佛陀となり人々の信仰淺からずと聞いたるヤスダラ姫は悅びよりも寧ろ非常なる驚きを以て、直ちに老父淨飯王の前へ駈つけた。淨飯王も此事を聞き、餘命已に風前の燈火のごとき老頽であつたから、姫と同じく非常に驚いて居た所であつた。

「父王にはお聞きなされましてか、悉達太子樣は、竹林にあつて人々の信仰も淺くないとの事、已に成道遊ばされたら、一たびは當カピラ城へお歸り下さるやうお取計ら

ひ下さいまするやう願ひあげ奉ります」

「ウム悉達のことをお前は誰から聞いた。實は今しがた、優陀夷が左樣に申した故、如何したものかと思案して居る所である」

「妾も、優陀夷大臣から聞きました故、取るものも取敢ずお伺ひいたしましたが、マカダ國竹林と申しては、道程も餘程遠いとの事」

と云ひかけて、ヤスダラ姫は憂ひの色を浮べた。

「道は幾ら遠くとも、已に居所が知れたる上は、決して心配することはない、優陀夷とも談じ、一日も早く迎ひのものを差向けるであらう」

「何うぞ宜しくお願ひ申します」

「必らず心配せぬが宜い」

と、淨飯王は、ヤスダラ姫を慰さめ、優陀夷に命じて、群臣の中で乘馬に長けたるもの九人を選び、マカダ國ラジャグリハ城に急行させ、具さに淨飯王及びヤスダラ姫

の意を告げ、カピラ城へ迎へ歸るやうと命じた。

が、其の後になつて、定めたる時日は經過したに拘らず、悉達太子は歸り來らず、又た使者の九人すら歸つて來ないので、淨飯王及びヤスダラ姫は、又た〳〵佛陀の身を心配した。

淨飯王の使者九人は、騎馬に鞭ち、竹林精舍まで往つた。この時恰かも佛陀は徒弟を集め、敎法を說きつゝあつたので、九人のものは圖らずも佛陀の圓滿無上の敎理を聞き、その說の絕妙に心醉し、肝心の使命を忘れ、尙ほも佛說の妙味を味はんとし、其のまゝ留つて歸ることを忘れたのであつた。

淨飯王およびヤスダラ姫は、九人の使者が久しく歸らないものだから、種々と心配を重ねた擧句、再び優陀夷大臣をして、佛陀の許に使者を送つた。ソして前の九人が歸つて來なかつたものだから、優陀夷も又た歸らないやうな事があつてはならぬ、と豫じめ必ず歸り來るべきことを誓はせた。

優陀夷は、馬を馳せ、晝夜を厭はずして竹林精舍に來り、佛陀に會つて淨飯王の手紙を渡した。淨飯王は、恩愛の情を事細かに演べ其の身の老衰一日を期すべからざることを記し、一たびカビラ城へ歸り來らんことを求め、字々悉く眞情に迫るものがあつた。

佛陀は父の手紙を見て、斷腸の思ひがあつた。ソして命に從つて、カビラ城を訪ぬべき旨をしたゝめ、これを優陀夷に渡した。優陀夷は大に悅び、直ちに馬を馳せて日ならずカビラ城に歸り、佛陀の返書を淨飯王に渡した。

淨飯王は、佛陀の手紙を得て大に悅び、車馬を準備して、佛陀の歸り來る日を樂しんで居た。彼の一族群臣等も、悉く首を長くして今や遲しと待設けて居たのである。

カビラ城の人々は、悉達太子が多年の修行を積み、成道滿願して、雲のごとき弟子を伴ひ、故國に歸り來ると聞き、狂喜措く能はず、道を修め、家を飾り、あらん限りの裝飾を施こし、佛陀一行を歡迎した。

遠近の人々は、此等の裝飾美しさと、又た佛陀の行列の麗はしきを見んとし、老若男女堵のごとく集つた。所が佛陀は、世間普通の學者のやうに、體面を飾ることを好まない一介の比丘となり、身には極めて質素なる道衣をつけ、右に杖を携へ、左に鉢をもち、跣足のまゝであつた。

高大無邊なる行列を見ることゝ思つた人々は、失望の餘りに不快の感じを起した。高僧大德をこそ迎へんとした裝飾は、たゞ一介の乞食坊主を迎ふるに過ぎなかつた。人々の失望云はん方なく、斯る場合には、人々は仙人に飲食をさせる慣例があつたがそれすら爲ないで何れも立去つて了つた。

淨飯王は、佛陀が城に近いたと聞き、必らずや多くの徒弟を引連れ、美々しき行列で來たことを思ひ、七寶の車馬を具へて我が子の悉達なる佛陀を城外に迎へた。

豈計らんや佛陀は、僅かばかりの徒弟を伴ひ、食を乞ひつゝ來るのであつた。淨飯王は、其の子の一乞食のごとき姿を見て、憤慨の情に堪へず、滿面に朱を濺ぎ、佛陀

の前に來り、

「お前は、何故其んな扮裝をして予を辱しめるのか、食を乞はなくとも、城中に來れば、幾らでも飲食し得られるではないか」

と云つて、淨飯王は、早くも其の眼を濡した。

「人々の家に食を乞ふは、我が種族の習慣でございます」

「何を云ふのであるか、汝は王族の子孫ではないか、汝の種族中に、そんな事をしたものがあるか」

と、淨飯王は、ヤ、聲を勵まして云つた。が、佛陀は更に言葉を和らげ、

「父君よ、父王は王統の家族にして、その子孫は王統のごとく見ゆるは迷ひでせう、人に我あることはない、今日あつて明日なき身は、王統を頼んで何になります、予は過古の佛の法統に屬し、過去の佛は悉く食を人に乞ひ、その施によつて生活して居りました。故に今食を乞ふて居ります、けれど父王よ、王統は法統の尊きに比ぶこ

とはできませぬ」

と云て論した。

佛陀の說く所を聞き、淨飯王も大に悟るところあり、其の顏色をやはらげ、佛陀の手をとつて、城內に導かんとした。佛陀は此時路上に於て、父淨飯王のために敎法の大要を說いた。

金冠を戴げる國王、乞丐の裝をなせる佛陀、二人が相對せる光景を見て、心なきものと、心あるものと、人々の心の裡は、いろ〳〵樣々の幻影をうつした。が佛陀の眼には、一切の裝飾、すべて雲のごとくに映つた。

此の時佛陀が、父淨飯王に說いた要旨は左の如くであつた。

正道に從つて之れを行へ、正道に從ふものは、世々幸福を受けるのである。正道に從へ、邪道に入るなかれ、邪道に入るものは、世々不幸に沈むのである。正と邪とは迷ふと迷はざるとに依つて岐れる。人生を正觀して、未來の地獄を怖れよ。

淨飯王は、大に悟る所あり、佛陀の手を執つて宮中に導き、彼に飲食を與へた。こに於て王の一族、及び臣下等は、皆集つて佛陀を禮拜した。

佛陀と淨飯王とは相對して座り、淨飯王の心の底には、一喜一憂こもゝ往來し、悉達よ、歸り來りて老父の後をつげ、されば老後の予は幾何か幸福であらうと云はんとした事は屢であつた。

けれど悉達は、今や成道正覺の身である、我が國王を見る、雲のごとく、塵のごとくであらう、彼の眼は、慈悲と智慧とに輝き、名利の影は少しも認めることは能ないと思つては、流石に其の希望を述べかねて、人知れず其の胸中を騷がせてゐた。

佛陀は父王の心を察し、

「我は父王が、その心を勞したまふを知る、慈愛の情は深く感謝するところであるが我身については、必らず、御心配下さるな。我は已に世上の榮華を離れ、遠く去つて又た歸ることが能ない所にまで達して居る。故に父王は、我を思ふの愛を、カピラ國

萬民の上に移したまはれよ」

と云つて、自己の決心を示し、尙ほ彼の四諦八道を懇に說いた。

淨飯王は、佛陀の言葉を聞き、その敎旨に感じ、

「我れ解脫の道を知つた。さきに我が心を惱したものは、今や拭ふがごとく消えて了つた」

と云つて深く安心の色を現した。

斯くて一族群臣は、佛陀の四方を取圍み、歡びの聲は城に充渡つた、が、たゞ一人ヤスダラ姫の姿のみが見へなかつた。

佛陀は訝かしく思ひ、宮女の一人に向つて、ヤスダラ姫は何れにあるかを訊いた。

宮女は、佛陀に向つて、

「姫は一室に閉こもり、一人悲みに沈んで居られます」

と答へた。

「何を哀しむのであるか、予が歸りたることを知らせたか」
「ハイ、早くお知らせ申しました、が、姫は太子様にお會ひ遊ばすことが能ないこと
が御座いまして」
「予に會はれないと云ふは」
と、佛陀は不審の眼を睜つた。
「太子様には御存じないかは存じませんが、太子様が御出家あそばしてから、いろい
ろの疑ひのために、一人お心を痛めて居られます」
「其の事であるか、なるほどヤスダラも難儀したといふ事は聞いた、が、彼の行ひが
惡いのではない、予は又た少しも心に留めては居らぬぞ」
「左様でございませうとも、姫様の貞節なることは、大王様も、優陀夷大臣も、能く
御存じのことでございますから」
此の時淨飯王は、口を開いてヤスダラが貞節なりしことを詳しく物語つた。

宮女は言葉をつゞけ、
「姫様に一點の邪なることは有りませんが、それにしても女の身としては……」
と云ひかけて佛陀の顏を仰いだ。
「たとひ其の行なくとも、一旦疑を受けた身は、予に顏を合せることができない
と申すのぢやな」
「ハイ、妾は、いろ〳〵にお勸め申しましたが、姫様には、其の身に疑ひなきものと
して、太子様がお許し下さるなれば、太子様が自ら我が室へお越し下さるであらう、
妾より進んでお目にかゝることはできないと、仰せになり、何うしても妾等の願ひを
お聞入れになりません、太子様、罪なき姫君のおん哀みを、慰め參らせられるやう、
偏へに願ひあげ奉つります」
佛陀は、宮女の話すを聞き、いと不愍に想ひ、自ら起つてヤスダラ姫の室を訪ねた
ヤスダラ姫は、佛陀の姿を一目見るや萬斛の涙は一時に迸しり、床より轉び出で、

その足下に泣きふした。ヤスダラは、其の夫を失ひしより已に七年の長い間、筆紙につくされぬ哀さのかず〳〵を嘗めたのである。

ヤスダラは、佛陀が業を遂げ、名をなして歸つて來たので、その心は亂れて糸のごとく、無限の哀みと、無限の恨みとを佛陀に訴へるのであつた。佛陀は其の背をなぜ茲に三世因果の理を說示し、彼の心を慰さめた。ヤスダラは、佛陀の聲に其の迷を覺り、其の子ラゴラと共に佛道に歸依した。

此れより先、佛陀の異母弟に、ナンダといふ人があつた。彼は佛陀が、カビラ國の王位につかなければ、淨飯王についで、當に其の位に上るべき王嗣であつた。佛陀が今回カビラ城に歸り、いよ〳〵王位をつがないことが確定したから、ナンダ儲君と定められ、皇太子の宮に移ることなつた。

こゝに於て、ナンダは、國王の儲君となつた祝、新らしき宮殿に移る祝、新婦ソンダラを迎へた結婚の祝との三ッの祝事をかねて賀宴を張つた。

佛陀は、其の席に招かれ、弟子と共に定められたる席につき、ナンダをして世の中の苦痛から脫しさせやうと思ひ、彼に向つて、邪念を滅すること、四諦を修むることを說いた。

ナンダは、佛陀の說を聞き、人世の眞理を悟つた。佛陀は卽ち鉢を彼に與へ、ナンダは其の鉢をうけ、食を盛つて佛陀に捧げた。

佛陀は之れを受けずして、直ちに座を立ち、ニクリッといふ林の中へ歸り、ナンダは鉢を持ちたるまゝ、佛陀の後に從つた。

ソンダラは大に驚き、窓よりナンダを呼び、

「慶事を捨てゝ何れへ行れるか」

と聞いた。が、ナンダは何の答へもなさずして、佛陀に從ひ、終に其の徒弟となつた。

新婦ソンダラは、其の夫が貴き王位をすてゝ、佛陀に從つたことを哀み、淨飯王に

願つて、ナンダが歸り來るやうに說諭せんことを乞ふた。

淨飯王は、ソンダラの身の上を哀むばかりでなく、又た自分が世嗣を失ふことを哀み、自ら佛陀の許に來り、

「お前が出家した時は、後にナンダが居たから、幾らか我が心を慰めることができたが、今は杖とも柱とも思ふナンダは汝に從ひ、止むなく我が孫卽ち汝の子のラゴラに位を讓らんと思へば、ラゴラも又た佛門に入つて了つた。斯の如くしては、我が王統は斷へて了ふ、予の哀み此れより大なるものはない、そして斯の如き哀みは、たゞ王位にあるものばかりでなく、何れの家にあつても、其の父母は非常に哀むことであらう、故に制を設けて、父母が許さないものは出家となることが能ない定めにせられよ」

と云つて、言葉を盡して佛陀に乞ふた。佛陀は其の言葉の理あるを以て、その乞ひに從ひ、徒弟を集めて、

「父母が聽さない場合は出家することを許さず」

との制を定めた。

佛陀は、七日間カピラ城に滯在し、それよりラジャグリハ城に歸らんとして、途中アヴアミ河に沿ふた。アラビヤ村に至るまでに、アナリツ、アナンダなどいふ、佛陀の親戚に當る人々は彼が徒弟となつた。

此の時に、ウパリといふものがあつて、佛陀に從ひ道を修めんことを求めた。ウパリは理髮を業とし、身分賤しきものであつたから、新らしき徒弟達は彼と同席することを好まなかつた。

が、佛陀は、他の王族と共に彼を佛弟子とした。そして不服なる徒弟等に向ひ、

「四大河は、河である間こそ、其の名を異にし、何河の水と云つて區別するが、已に流れて海に入れば、之れを區別することは能ぬ、貴きものも、賤しきものも、俗人である間こそ、王族とか、貴族とか平民とか區別するが、悟道に入り俗塵を解脫したるものは、等しくこれ佛陀であつて、身分の高下を論ずる必要はない、故に我が徒弟た

るものは、等しく沙門釋子であつて、如何なる階級の人も之れを區別することを許さぬ」

と云つて人々を諭したので、何れも佛陀の說に服し、これより誰あつて身分の高下を論ずるものはなくなつた。

佛陀が、一族の青年を出家させ、彼等を伴ひ、ラジャグリハ城に歸り、竹林精舍に住つて居た、其の時に、コーサラ國の首府シラーウスチといふ所の富豪に、アナタピンヂカといふ人があつた。アナタピンヂカは（スダッタとも云ふ）家に多くの金を貯はへ、好んで孤獨を恤れむので、當時の人は彼れを給孤獨と呼んで居た。

ラジャグリハ城の或る富豪が、彼の妹を娶り、二人は共に商品を貨車にのせ、常に往復貿易を業としてゐた。そして一人が他の城市に赴くときは、他の城市に住む一人は、之れを城外に迎へて居たのである。

一日アナタピンヂカが、ラジャグリハ城に來た、が、常に城外にまで迎ひに來る

筈の、妹婿は、此の時に限り迎ひに來なかつた。彼は不思議に思ひながらも、ラジャグリハ城に入り、義弟の家近くまで往つた、が、例のごとく迎ひに來るものがなかつた。

アナタピンヂカは、不思議で堪らなかつたから、其の家に入るや、先づ第一に、何か家內に異つたことがあつたのではないかと訊ねた。スルと義弟は明日佛陀および其の徒弟を招くので、其の準備に忙殺され、出迎へる暇がなかつたといふ。こゝに於てアナタピンヂカは、佛陀とは何人であるか、又た如何なる敎法であるかを聞き、大に尊崇の念を生じ、其の夜直ちに佛陀を訪ふて、法話を聞かふと思ふたが、夜が更けて居たので、その夜は義弟の家に泊り、翌日朝早く佛陀を訪ねた。

佛陀は、アナタピンヂカが、法話を聞んとする熱心を嘉し、彼のために彼の四諦八道の敎法を說いた。

アナタピンヂカは、佛陀の法話を悅び、直ちに三寶に歸依し、終生ウパソク（僧と

ならずして佛法を信ずるもの）となることを誓つた。

此の時アナタピンヂカは、佛陀に向つて、

「我が國の首都シラーウスチ城は、土地は肥え、民治まり居れど、未だ貴き敎を聞くことができない、實に人世の大恨事と思ひます。故に我れ形勝の地を布施し、一寺を建て、佛陀および御弟子達の爲に、說敎所を建立したいと思ひます、何卒此の願ひをお許し下さい」

と云つた。

佛陀は、アナタピンヂカが、その同胞を思ふの情厚きに感じ、其の乞ひを許し、シャリート、プッーラに命じ、彼と共にシラーウスチ城に往き、寺院の地形を撰定させた。

アナタピンヂカは、シラーウスチ城に歸り、先づ王子ギダに逢ふて、佛陀の爲人および其の敎法の尊きことを話し、ギダの所有地なる林園を讓り受け、シャリート、プッーラを工事の監督役とし、こゝに一大寺院を建立した。祇園精舍といふのが此れである。

祇園精舍といふは、頗る大なる寺院であつて、居間、寢室、禮拜室、集會堂、休憩室、總會所、病室、運動室、倉庫、浴場、泉水、花園等を備へ、殆んど全美を盡したるものであつた。

シラーウスチ城の王子ギダも、又た其の山門を築き、之れを衆僧に献じた、佛陀は此の寺院に最も長く住み、多くの敎文を說いたのである。

此れより前に、佛陀が、マカダ國の竹林に居た時に病にかゝつた。國王ビンビサラは、侍醫耆婆に命じて、佛陀の病を診察させた。

耆婆は、ビンビサラの子、無畏といふ王子の庶子であつた。彼は長ずるに及び、北印度トクシャシラといふ所へ往き、七年の間醫術を治め、業成り國に歸つた。彼は後世に至るまで其の名を殘し、耆婆と云へば名醫の代名詞として使はれる位であるから誠に醫術の奥を極め、一たび病むものを診察するときは必ず之れを全治するとの評

判であつた。故に彼はビンビサラ王に召され、宮中の侍醫となつた。

彼は佛陀の病を診察し、數日に之れを全治させた。佛陀は、彼のために法話をなし彼は之れに感じ、直ちに佛法に歸依してウバソクとなつた。ビンビサラ王は、佛陀の本復を悅び、此時からして、耆婆は宮中の侍醫たると共に、佛陀及び佛弟子の常醫たることを命せられた。

佛陀の敎法が盛んになるにつれ、外道の迫害はます〳〵甚だしくなつた。佛陀に反對する外道等は、センシャといふ一少女を使つて佛陀を中傷せんことを企だてた。

センシャは、シラーウスチ城の信者等が、祇園精舍の法話を聞終り、シラーウスチ城へ歸らんとする頃を計り、其の身に美服をつけ、手に花を執つて祇園精舍の方へ向つて往き、殆んど毎日欠すことはなかつた。

シラーウスチ城の信者等は、毎日其の歸途に於て、彼のセンシャといふ美人に逢ふので、

「オヤ今日も又たセンシャが向ふから來ますね」

「なるほどセンシャに違ひない、何所へ往くのであらう、この夜更けに女一人で」

「何所へと云つて、此の道は外に往くところはない、お寺院へ往くに定つて居ますよ」

「お寺と云つて、アノ祇園精舍ですかい」

「然うですとも」

「佛陀も夜になると、女を近づけられますかね」

「我慾を離れられたる佛陀、我々が信ずる佛陀が、まさか不行蹟があらう筈はない」

「其れでは誰の所へ往くのでござらうか」

「未だ修業中の若い徒弟が澤山居られますからナ、多分其のお方等が慰まれるのだと思ひます」

「師匠の前で、戒めを犯すことは能ますまい、私は佛陀が可愛がられるのぢやと思ふのです」

と云つて、だん〳〵人々の口に上るやうになつた。

多くの信者の中には、外道のもの等が信者を裝ふて居る、そして彼等は口を極めて佛陀が人知れず美しい女を愛してゐることを主張し、勉めて佛陀の德を傷けんとするのであつた。

或る朝、信者等は、佛陀を禮拜せんために、祇園精舍へ往んとすると、遙か向ふの方から、彼の美しきセンシャが來るのであつた。

信者に化げたる一人の外道は、立止まつて人々に向ひ、

「向ふから美しい女が來ましたね」

「センシャでは有りませんか、センシャなら毎朝今時分に歸つて來ます」

「此れは怪しからん、今時分に寺院から女が歸つて來るとは聞捨になりません」

と、假信者は殊更に聲を高く叫ぶので、信者の中にも、多少好奇心に驅られて居た連中があつたから、

「眞實です、先日から變なたとだと思つて居たが、全體誰の所へ泊りに往くのでせう」

「誰の所へと云つて、外の人の所へ泊られますものか、そんな事が知れたら直ぐに破門せられるぢやア有りませんか、泊める主は佛陀に定つて居ます」

「佛陀、如來樣がですか」

と早くも信者等は顏色を變へた。

「然う慾らなくつても宜い、拳を固めたつて仕方がない、幾ら佛陀だつて、人の前でこそ、慾を去つたとか、我を離れたとか云ふものゝ、ヤッパリ人間ですからね」

と、冷笑口調に言り出した。信者等は他の佛弟子に邪なる行ひをするものがあつても、アノ美しいセンシャを樂しんで居るかは知れない、けれど佛陀に限つて、そんな不德なことがあるとは信じられない。

「人間ぢやと云はれるが、そりやッ貌を見れば人間に違ひない、けれど俗塵を離れられた佛陀、人間であつて人間でないことは誰も知つて居る、お前さんのやうな事を云

ふと、今に罰が當りませうぞ」

「人間を人間と云ひ、泊つたものを泊つたと云つた所で、別に罰が當るとは思はれません、論より證據ぢや、向ふから來る女に聞いて見たら何うです、其れが一番確でせう」

と云つて、一人の外道は、多くの信者等を尻目に見て、

「モシ〳〵其所のお女中、少し物を尋ねたいからお待ちなさい」

と呼止めた。

美しいセンシャ、彼女の一顧は、容易く一國一城の主の心を奪つたであらう、が、果して天下萬民の父たる佛陀の心をも迷はし得たのであらうか。

好奇心に驅られた人々の眼は、期せずしてセンシャに集つた。彼女を呼止めたる一人は、

「おん身は何れより歸られたか。そして昨夜は何れへ泊られたか、今我等の間に議論

が起つた、何卒包まず明して、我等の疑を晴されよ」

と、突然に訊ねた。女は耻かしさうな素振を見せて、

「そんな事を聞て何になりませう、許して下されよ」

「いや〳〵、許して呉れと云つても、その事を明さずば、此所一寸も動かすことではない」

「いやでござんす」

「察する所、おん身は、昨夜佛陀の許に泊られたナ」

「エッ」

と、女は呆れたやうな風をして、

「それを貴方は何うして御存じでございます？」

「知れるとも〳〵、お前の身體にうつりし其の香、抹香臭いが何よりの證據ぢや」

「テモ、マア怖ろしいお方、斯う見破られては隱すも無駄事、仰しやる通り、昨夜は

如來樣のお傍に泊りました。けれど此事ばかりは……」

「ウム内密にして呉れと申すか、道理／＼、能くも眞實を話された。これに免じて決して他言は致さぬ、身體を大事になされよ」

女は立去つた、彼の僞の信者は、其の後を見送り、

「爭はれぬものぢや、アノ女は佛陀の種を宿したぞ」

と云ひながら人々の方に向直つた。信者等は此等の問答を聞き、不思議の眼を睜り等しく彼の男を見守つた。男は仕濟し顔になり、

「皆さんもお聞きの通り、佛陀もやつぱり人間でござらうがな、說法をする時は虫も殺さぬやうな顏をして、夜になればアンナ美しいのを傍に引付けて居るのぢや……今までは眞の佛と信じて居た、旨く騙された、達者な辯舌に迷はされたが、モウ信じない、だまされない、說敎も聞きませぬ」

と云捨てゝ、彼の男は何れへか立去つた。

此の中傷は思ひの外に圖に當つた。佛陀を信じたものすら、多少の疑を起した況して半信半疑の人々は、何れも佛陀を輕んずる心を生じ、佛陀不信の聲は其れから其れへと傳はり、これを機會に外道等は相計つて佛陀の德を傷けんとするのであつた

而して不思議なことには、此の事があつてから、彼のセンシャの美しい姿は、しばらく見られなかつた。信者の中には事の眞相を捕へんとし、殊更ら夜を更して、此の淋しき道を探るものもあつたが、彼のセンシャの姿は終に見ることが能なかつた。

其れより六七ヶ月經ち、忽然として疑問のセンシャは現はれた。彼女は多くの信者等と共に、祇園精舍に詣づるのであつた。

彼女の風聞は、漸く人々の耳に遠ざかつた頃に於て、再び其の美しい姿を現したので、人々の視線は同じく彼女に集り、そして彼女の腹部は非常に膨れ、誰れの眼にも姙婦であることが一目に認められた。

「センシャを御覽なさい、アノ腹の膨れて居ること、モウ八月位に見えますよ」

「然うですね、全體誰の種を宿したんでせう」
「如來樣のお種だと云つたさうですが、眞實でせうか、アンナ大な腹をして、人樣の中へ出なくとも宜いぢやアありませんか」
と、人々は、口々に話して居た。佛陀は例の如く精舍の高座に上り、熱心に說法しつゝあると、彼のセンシヤは俄かに立上り、
「佛陀よ、おん身は妙法を說き、辯舌流るゝが如くである、が、妾は、おん身の胤を宿してより、今日になるまで產室も造らへて下さらず、姙婦の妾を捨てゝ顧られないが、それでも大慈大悲の佛陀と云はれますか」
と大聲に詈るのであつた。
佛陀の說敎を聞てゐた人々の中にも、信仰の淺きものは、センシヤの言葉を聞き、大に驚いた。
が、其の身に疚しきことなき佛陀は、センシヤの言葉を耳にもかけず、熱心に說敎

をつゞけて居たので、センシヤは堪らずして、尙ほも聲を張上げ、佛陀を詈るのであつた。
佛陀は、早くもセンシヤの聲が、通常姙婦のごとくならざるを知り、彼の女が外道に使はれ、我が道を傷けんとするものなるを悟り、言葉靜かにセンシヤに向ひ、
「靜かなれ女よ、汝は姙婦なりと云ひて、衆人を欺むき、我が法を傷けんとするは、畢竟外道に頻まれたことであらう。が、汝は凡夫を欺き得るも、我を欺くことはできぬ、汝の腹に隱すものは何ものぞ、姙婦の風を裝はふも、汝の聲は姙婦にあらず、我汝が其の腹を膨らし居るものを示さん」
と云つた。センシヤは大に驚き、佛陀の慧眼に服し、腹部に隱したる木盆をすてゝ何れともなく其の姿を隱して了つた。こゝに於て外道等の惡き企なることが知れ、佛陀を信ずるものは、一層恭敬の念を高めた。
佛陀の法を傷けんとして、邪なることを以て、正しき光を蔽はんとしたる外道等は

かへつて正法の光を増した。そして彼等は、到底正法に敵しがたきことを悟り、終に佛陀を信じ、其の教を奉ずることゝなつた。

佛陀が成道第十六年に、アラビと云ふ所へ往つた。此の地にはアヲセン人でない、夜叉といふ一種異つた種族が住んで居たが、その中にアータヴサカといふものがあつて、佛陀と左の如き問答をした。

「如何にして彼岸に渡ることが出來るか」

「信仰により渡ることを得」

「如何にして生死をこえることが能るか」

「熱誠により越ることが能る」

「如何にして人は苦をはなれることが能るや」

「精進を以て苦を離れることが能る、精進とは、勇往邁進教法を實踐することである」

「如何にして人の意を淨くすることが能るか」

「智慧を以て意を淨くする」

「如何にして智慧を得ることができるか」

「佛法を信じ、涅槃を求むるものは直ちに智慧を得る」

「如何にして財寶を手に入れることが能るか」

「正法を行へば財寶は自から來るのである」

「如何にして名譽をあげることが能るか」

「眞理に從へば、名譽をあげることが能る」

「如何にして朋友を得られるか」

「慈善によりて朋友を得られる」

「如何にせば、臨終に憂ひ哀むことなきを得るや」

「心に信念を有し、四諦を覺り八道を行へば、臨終に於て憂ひ哀しむことはない」

夜叉アータヴサカは、佛陀の答へを聞き、大に悟る所あり、

一、我れ佛に歸依し奉つる。願はくは衆生と共に、大道を體解して、佛種を紹隆し奉つらん。

二、我れ法に歸依し、願はくは衆生とともに、深く經藏に入り、智惠海のごとくならん。

三、我れ僧に歸依し、願はくは衆生と共に、大衆を統理し、一切無礙ならしめん。

と、直ちに三寶に歸依して佛法の信者となつた。

此の時に當り、無害といふ凶賊があつた。彼は山林に隱れ、しば〳〵出でて人を害し、害する毎に必ず其の指を斷つので、人々は指鬘と呼んで、非常に彼を怖れた。

佛陀は、單身林中に入り、無害に會つた。無害は佛陀を害せんとしたが、その溫和なる容貌は、直ちに手を下すことが能なかつた。佛陀は、彼に向つて慈悲忍辱の法話をなし、遂に凶賊を改悟させ、祇園精舍に連歸り、徒弟の內に加へた。

佛陀が、マカダ國に居た時に、バラダジャといふものがあつた。彼はバラモンであつたが、家は富榮え、多くの牛を使つて耕作に從つて居た。

一日佛陀は、彼の耕地に往き、食を乞ふた。すると彼は佛陀の前に立ち、しばらく思案をして居たが、やがて笑ひながら口を開き、

「佛陀よ、おん身は因果を說れる身分ではないか」

「然り、我は因果の道を說き衆生を濟度するものである」

「因果を說くものが、何故に人に食を求められるや」

「佛が食を求むるは、古來よりの習慣である」

「其れをいふのではない、我は耕やし且つ種子をまく、耕やして且つ種まく因により穀物の果を得て居るのである。汝は食物を得んとして、耕やし且つ種まくことを爲さず、人の前に立て食を求めんとするは、其の說くところと行ふところとが異つては居らないか」

「否よ、予も又た耕やし且つ種まくにより、予は不朽の收穫を得つゝあるのである」

バラダジャは、佛陀の言葉を解しかねて、瞳をこらして佛陀の身邊を眺め、其の顏に不審の色を浮べた。

「おん身がいふ所の不朽の收穫とは何か」

「予はもろ〳〵の苦惱を斷ち、甘露の收穫を得んとするものである」

「汝の農具は何であるか」

「バラモンよ、予が說く所を能く聞けよ、信仰は種子である。修行は雨である。佛法を信じ涅槃を求め、これによつて智惠を得ることが能る。智惠は鍬たり鋤たり、又た農牛である。中道は鍬の柄であつて、心の緒を以て之れを結ぶ。我は身を謹しみ、言葉を愼しみ、食を節し、眞諦の刄を以て雜草を刈り、慈悲と忍耐とにより解脫を得、勇往邁進、敎法を實踐して涅槃に向ひ、寸を進み尺を趁ひ、嘗て退歩することはない此の法を以て耕やさば、何人と雖ども甘露を得て、もろ〳〵の苦惱を斷つことが能るのである」

と、佛陀は、いと懇に言葉を盡して諭した。

バラダジャは、佛陀の言葉に深く感じ、直ちに佛法に歸依し、出家して佛陀の徒弟となつた。

此れより先、提婆は、佛陀が悉達太子たりし時から屢々佛陀を害し、彼のヤスダラ姫を手に入れんとし、種々なる企てをしたのであつたが、佛陀が彌々成道解脫し、其の名聲は天下を壓せんばかりとなつたのを見て、終に佛陀に抗するの不利益なることを悟り、意を決し罪を謝して、佛陀の徒弟となつた。

けれど提婆は、元來那念深き性質で、他の弟子達のごとく、成道解脫することが能なかつた。が、彼は自ら其の不德を顧ることなく、反つて佛陀が自分を用ゐ呉れざることを恨み、佛陀が祇園精舍に安居し居つたる時に、單身精舍を去つて、マカダ國カヤ山に歸つた。

ラジャグリハ城王の太子に、アジャータシャトルといふのがあつた。ビンビサラ王

が佛法に歸依して居たから、彼も父に傲ひ佛法を信じて居た。故にしば〳〵提婆と出逢ふことがあつた。

提婆は一時佛陀に從つて居たが、之れに叛いて、ラジャグリハ城に歸るや、彼の得意とする魔術を以て、アジャータシャトルの心を奪ひ、終に太子を魔道に陷いれた。

ビンビサラ王は、アジャータシャトルが、日に增し惡行を募らすので、しば〳〵彼を諭したが、アジャータシャトルは、更らに父王の諫めを用ゐずして、ます〳〵亂行を敢てし、全く改愼の狀を認めることが能なくなつた。

ビンビサラ王は、太子にして其の行を改めなければ、太子たることを廢する外はない、斯る亂暴なるものに王位をつがすことは能ない、と確く心を決し、聖旨を大臣に傳へられた。

アジャータシャトルは、早くも之れを悟り、提婆の許に馳つけ、其の勇と邪智とをかり、危急の場合に應ぜんとした。かねてより事あれかしと待設けたる提婆は、大に

悅んで太子を迎へた。

アジャータシャは、穩かならぬ色を浮べ、提婆と相對して座つた。彼は慌てたる口調にて、

「一大事が出來いたした、何とか好き工夫はあるまいか」

「一大事と仰せられるは」

と、提婆は太子の顏を見護つた。

「一大事といふは」

と云ひかけて太子は四方を見廻しながら、

「少し他聞を憚かることであるが、差閊へはないか」

「御心配には及びませぬ、何なりと御話し下さい、他に洩る憂ひは毫もございません」

「實は予の不行蹟が父王の耳に入り、きびしいお叱りを度々受けた。が、乘かゝつた船、今となつて然う四角張てばかりも居られず、つい〳〵馬耳東風と聞流して居たが

闘らずも父王のお怒は非常なもので、トウ〳〵太子を廢するとの御決心ぢや」

「其れは驚き入りました。シテ太子様には如何遊ばす御所存でございまするか、お爲めとあれば、たとひ水火の中も辭しませぬ此の提婆、御服藏なくお指圖を願ひます」

「指圖と云て、予は未だ斯うと決心したことはない、おん身に會つて、委細の相談をすれば、必ず妙案があると思つて參つたのぢや」

提婆は、しばし思案したる後、

「太子様の御決心一つで、善ともなれば惡ともなりませう、何と云つても一大事、御油斷はできませぬ」

と云つて、意味ありげに提婆は太子の顏を覗いた。

それより二人の間に、話聲は絶へなかつた。大凡二時間ばかりも經つと、アジャータシヤ太子は、滿面に笑を浮べ、幾度か頷きつゝ、

「實に妙計奇策ぢや、其れで予も安心いたした」

「一旦お引受け申した上は、必らず御心配御無用にござります」

「おん身の勇と智とを、たゝ願むばかりである」

「若し事成就したる曉は、拙僧の願ひお忘れ下されぬやう」

「云ふにや及ぶ、マカダ國の敎法は汝に一任する。佛陀の徒弟は、すべて汝の徒弟とするであらう」

「有難き仰せ、其れにて拙僧も望みが達し、太子様にも、禍を轉じて福を來されることと存じます」

「必ずぬかるまいよ」

「必得ました」

二人の間には、希望に滿ちたる談話が取換された。間もなく太子はカヤ山を立出で我が家へ歸つた。

當時提婆は、佛陀に背き、カヤ山に歸り、徒黨を集め、別に敎團を組織し、佛陀に

抗して其の教法を廣めんとして居たのである。

斯る場合に、太子の賴みを受け、彼は已に其の目的の大半を達したる如く悅んだ。彼は太子が立去りたる後、直ちに徒黨のものを集め、計畫の詳細を語り、部署を定めて其の任務につかせた。

太子は提婆と計るところあり、己に味方する臣下を集め、密かに兵備を嚴にし、何時にても多くの軍勢を動し得る準備を調へた。

提婆は、ビンビサラ王の許に使僧を送り、佛陀が、ラジャグリハ城に立寄られることを報じた。

王は提婆より使僧を送つて來たとは知らず、全く佛陀からの使僧だと信じ、僅かばかりの從者をつれ、直ちに城外まで佛陀を出迎へた。

太子アジャータシャは、父王ビンビサラが、王宮を出たる報知があるや、直ちに多くの兵士を引連れ、王宮に闖入して、王に從ひ彼を廢する議に參加した人々を縛し、

ことゝ〳〵く之れを獄舍に下した。

ビンビサラ王は、斯くとは知らず、城外に出でて佛陀を迎へて居たが、暫らく待つも佛陀の姿が見えないので、侍臣の一人に命じて、程近き山に上り佛陀の一行を遠く見させた。

侍臣は命を奉じ、直ちに山上に駈上り其の中腹まで行くと、何れからともなく二三人の荒れものが出來り、突然侍臣を叩き伏せ、彼を縛して樹の枝に吊さんとするのであつた。

ビンビサラは、遙かに之れを望み見て、他の侍臣等に急ぎ駈つけて、先の侍臣を助け、暴徒等を縛し來れと命じた。

侍臣等は、直ちに命に從ひ、程遠からぬ山上に駈つけた、そして彼等が其の中腹まで往くと、再び暴徒が現はれ來り、其の數は前に幾倍して、トテも敵對することが能ないから、侍臣等は、手を揃へて暴徒等のなすまゝに任せた。

此の時、たゞ一人の侍從を從へ、意外の珍事に驚きたる、ビンビサラ王は、怒の色を現はし、侍臣を顧み、

「何者であるぞ斯く亂暴を働らくものは」

「何者とも合點つかざることゝ心得ます」

「此の有樣では、暴徒の數は幾らあるか知れない、汝は早く城内へ立歸り、急いで軍兵を引連れ參れ、とく致せ、早く參れよ」

と、王は言葉せはしく命じた、が、侍臣は更に動ず、

「お言葉を返し、恐れ入り奉りますが、此の場の仕儀を考へますに、大王一人を殘し、城内へ立歸ることは宜しくございません、願はくは大王にお伴いたし、共に急いで城内へ歸りたう存じます」

と言葉靜かに諫めた。

「何を申すのぢや、斯る場合、寸時も猶豫もならぬぞッ」

「ぢやと申して、大王一人を殘しまして、萬一の變が起りました時は、大王は如何遊ばします」

と云はれて、ビンビサラ王は、思はず顏色を變へた。

「サ、一時も早くお立退あそばしますやう、斯く申す内にも、暴從等は如何なる企をなし居るや計られず、急ぎ御歸城遊ばしませ」

「如何にものう、斯くまでに計りたる所を見ると、城内にも如何なる變ありしやも計られない、して見ると佛陀が參らるゝとは全くの詐と見へる、汝の申すごとく、斯うして居る場合でない」

と云つて早くも此所を立去らんとした。

此時城内の方より、砂煙を立てゝ走來る一隊の人馬があつた。

王は早くも之を認め、

「アノ人馬は敵か味方か」

と云ひつゝ足を止めて不安の色を浮べた。

「畏りました」

侍臣は直ちに駈出し、やゝあつて立歸り、

「御安心遊ばしませ」

「味方であつたか、して何人が率ゐ居るぞ」

「アジャータシャ太子がお引連れになり、一隊凡そ三百人ばかりでございまする」

と聞て、王はます〳〵不安の色を増した。

侍臣は之を怪み、

「太子様がお越しになれば、モ早御心配なき筈、然るに大王のお顔に、不安の色を増させられるは何故でございまする」

「道理なる不審である、けれど彼の一隊は、味方にして味方にあらず、恐らく今回の事變は、彼太子の企に違ひない、手後れになりたるか殘念なる事をいたした」

と云つて歎聲を發した。

「然う仰せられると、或は太子様が彼の一條を知り、先廻りいたされたのでございませう、斯くなる上は太子たりとも用捨はいたしませぬ、一方を斬破り、城内に殘れる忠臣を呼集め、一戰爭いたす外はございません」

と、侍臣は、早くも腰刀に手をかけ、氣色を變へて立上らんとした。

王は之れを止め、

「やよ待て、急ぐは反つて不利益であるぞ、予に考へもあれば、必ず逸まつてはならぬ」

「ぢやと申して、斯る企をいたされる上は、太子様に如何なる惡心が芽ざしたか知れませぬ、同じ死するなれば、叶はぬまでも斬て〳〵斬りまくり、あはよくば太子様に一刀なりとも恨みが晴したうございます」

「如何に太子の心が變つたとて、眞逆に殺すまでも致すまい、況して一人の力で多勢

に當るは無益である。時を待て、時を待てば、惡運は自から亡る時が來るであらう」

「固より大王の恩顧を蒙りたるもの、此のマカダ國には雲霞のごとく居りまする、彼等必ず指を喰へて、太子の爲すがまゝに捨置く氣遣はございません。仰せに從ひ、決して短慮を起さず一時は捕虜と心を決めました」

と云ふ內に、一隊の兵士等は、早くも二人を取圍んだ。

アジャータシャ太子は、提婆のために迷はされ、終に父王ビンビサラを捕へて獄に下し、自らマカダ國王の位に上つた。

ビンビサラ王は、幽囚の身となつた、アジャータシャは、しば〳〵彼を殺さんとしたが、流石魔道に陷りたるアジャータシャも、子として其の父に刄物をあてるに忍びず、終に食を與へないで、無慘にも獄中に餓死させた。

ビンビサラ王妃キダイケ未亡夫人は、王が幽閉され、又た餓死せられたことを聞きます〳〵人生の無情を感じ、心の底から佛陀を信じ、終に佛陀に歸依し、比丘尼とな

つて一生を終つた。

アジャータシャ王は、自ら父王を殺し、王位に卽いたが、國民は彼を信ぜず、機に乘じて彼を倒さんとするものが多いので、戰々競々として其の獨を護るに、日も此れ足らざる有樣であつた。だからして彼の提婆に約したるごとく、佛陀の徒弟を奪つて、これを提婆に與へることが能なかつた。

提婆も初めは、アジャータシャが王となれば、佛陀を除き、自ら僧衆を率ゐることは極めて容易なことゝ思つた、が、肝心のアジャータシャは、ます〳〵人望を失ひ佛陀はます〳〵人々の信仰を得、恰かも人々に無常を悟らすために、云換れば佛法の敎儀に裏書するために働いたごとき結果を來し、自ら世に立つ望はなくなつた事を知り、此上は佛陀を殺すより外に手段はないと思つた。

斯く決心した提婆は、ある博徒を雇ひ、佛陀を殺し來れと命じた。博徒は金に眼を暗まし、直ちに提婆の意を奉じて佛陀の許に駈つけた。此時佛陀は、信徒を集めて法

話をして居たから、博徒は何心なく、その法話に耳を傾けると、佛陀は殺人の未來の怖るべきことを諭し、雄辯滔々と說來り說去つて居た。彼は思はず佛陀の說に感じ、未來の怖ろしきを悟り、終に佛陀の前に彼を殺さんとしたる罪惡を懺悔した。

これより先。提婆は、博徒に命じて佛陀を殺さんとしたが、萬一此事が世の中に知れては、一大事であると思ひ、他の惡徒を雇ひ、彼の博徒を途中に待受けて殺し來れと命じた、そして彼は他の場所に待受け、此の惡徒をも殺害なし、以て罪跡を蔽はんとした。

ところが此の惡徒も、彼の博徒が歸り來るの遲きを待詫びて密かに佛陀の許まで來て見ると、恰かも彼の博徒が其の殺意を飜へさんとする。殺人の未來を說きつゝある最中であつた。

第二の惡徒も、最初の博徒のごとく終に佛說に感じ、未來の怖しきに其の身を慄はし、佛陀の前に叩頭し、其の罪障を懺悔した。

佛陀は、此等二人の惡徒に、尙ほも敎訓を與へて、彼等の乞ふに任せ、徒弟の中に加へ、佛道を修業させた。惡に强きものは、善にも又た强しとは、能く俗に云ふ所であるが、此の二人も此の俗言に洩れず、終に悟道に入り成道を得たのである。

提婆は、惡徒等が、首尾よく目的を達し呉れゝば宜いがと、彼の惡徒の歸り來るを待て居たが、何時まで經つても歸らないから、稍不安の念を起し、密かに人をして探らせると、二人とも佛陀を信じ佛法に歸依したことを知り、人を使つて到底佛陀を殺すことの不可能なることを覺つた。

彼は此れまでもなく、しば〳〵佛陀を害せんとして、いろ〳〵に工夫したのであつたが、如何なる惡人も大德なる佛陀に手を下すことが能ないことを悟るや、其の後百方苦心の末、終に獰猛なる動物の力をかり、佛陀の生命を縮めんことを企てた。

彼は蛇も使つた。猛獸も使つた。が佛陀の前には、靈性なき此等の動物も、首を俯れ尾をふるのであつた。當時マカダ國に、ナラギリと呼ぶ惡象があつて、何人に限ら

ず、彼の通路にあるものは、彼の力強き鼻に打れ、其の一命を失ふのであつた。

百計盡きたる提婆は、此の惡象の話を聞き、大に悅び、その所有主に禮物を厚くし佛陀が進み來る通路に向つて、彼の怖るべき惡象ナラギリを放たせた。スルと惡象は驀進に佛陀を目がけて突進んだ。

惡象ナラギリに睨まれたる佛陀の一命は、風前の燈火のごとく危かつた。ナラギリは、鼻を打振り、たゞ一打と佛陀の前まで來た。

遙かに此の光景を眺めたる提婆は、今日こそは目的を達し得たりと悅んで居た、が惡象ナラギリは、佛陀の溫顏に接するや、恰かも彼を拜禮するごとく、鼻を低れて佛陀の前に跪づいた。

斯くと見たる提婆の失望は云はん方なく、

「ア、怖ろしき佛陀よ、凡そ生あるものは、毒蛇も猛獸も、又た終に彼を害する能はさるか」

と云つて嘆息した。

けれど提婆は、尙ほ佛陀を害せんとするの心は止まなかつた。其の後は一層思を凝し、其の目的を達せんとし、夜も碌々眠ることなく、終に一の妙案を思ひ浮べた。

人を以てするも、獸を以てするも、凡そ生あるものは佛陀を害することは能ない、これ彼が屢々實驗したところであつた。故に佛陀を倒すは、生なきものを使ふ外なきを悟り、彼は或日佛陀が靈鷲山の麓を通行することを知り、人知れず山上に上り、今や遲しと佛陀が來るを待受けた。

佛陀は斯る場所に自分を狙ひつゝある惡魔あることを知らず、口に念佛を唱へ、たゞ一人杖によつて歩みを運び、提婆が忍び居る眞下まで來た。

此時提婆は時來れりと打悅こび、前より微動を與へつゝあつた、幾百貫とも知れざる大石を轉がした（幾百貫の石を提婆一人の力で自由にしたなどは、一寸信ぜられないと思はれるが、前より微動を與へ習慣性を應用する時は、斯る大石も易々と自由に

することができる)。

提婆は今度こそは、佛陀の身體は粉碎せられたらう、無心の石が、佛陀を憐れむことはあるまい、と深く其の成功を期してゐた、が、不思議なるかな、其の大石は、轉がり來る途中に於て、幾つにも打壞され、僅かに其の一片が佛陀の足を傷けた。

斯くまで計つた提婆は、又たも僅かに其の足を傷けたばかりで、終に佛陀を殺すことが能なかつた。是に於て提婆は、到底佛陀を殺すことが能ないことを悟り漸く殺害の惡念を捨てゝ了つた。

けれど已に新敎を起したる彼は、飽くまでも佛陀の敎義に反對し、佛陀を陷れて自己の新敎を盛大ならしめんとし、百方手を盡し、國王の力をかり、金の力を使ひ、漸くにして數百人の徒弟を手に入れた。

或日佛陀の高弟、シャーリ、フットラ(舍利弗ともいふ)アーウドガラ。フットラ(目蓮ともいふ)の二人は、提婆が佛陀の徒弟を誘惑するを憂ひ、佛陀の許を受け、提

婆の許へ來た。

提婆は、二人が佛陀に背き、自分に味方するものだと思ひ、厚く彼等を遇し、心の底から悅んだ。が、二人は正法を說き、衆僧の過ちを改めさせるためであつた。故に二人は提婆の眠りゐたる時に乘じ、熱心に邪說を排し、正法を說き、衆僧をして過ちを悔ひ佛陀の許に歸復させた。

提婆は玆に全く其の徒弟を失ひ、其後は憂鬱煩悶一日として安きことなく、身心共に衰ろへ來り、終に病のために冐されて此の世を去つた。

當時已に外道等は、多く佛陀のために屈伏せられて居たので、提婆が死してから後は、又た佛陀に抗するものなく、彼の提婆に組みしたる、マカダ國のアジャータシャ王すら、父を殺したる過を悔ひ、幾もなくして再び佛法を信ずるやうになり、マカダ全國は悉く佛敎信徒となつた。

アジャータシャ王は、人となり勇武を好み、兵を出して四方を攻め、彼の佛陀の本

國なるカピラ國を亡ぼし（當時淨飯王は已に此の世を去つてゐた）又た祇園精舍の所在地なるシラーウスチ城（舍衞城ともいふ）を降し、終に中印度の盟主となつた。

彼は一旦其の非を悔ひ、再び佛法を信じてより、大に此の教義を保護し、佛陀の死後、彼の三藏結集の擧ある、彼又た少からざる力を盡した。が、此時から中印度は戰亂絶ゆる暇なく、傳道は益々困難となり、佛陀の徒弟は自から四方に散じ、思ひ〳〵に其の教を弘めるやうになつた。

佛陀は三十歳にして成道し、それより五十年の間、遊化度生一日も安逸に暮すことなく、五天竺は其の教法に從ひ、こゝに救世の大使命を完ふした。

佛陀は八十歳の時に、ベサール城に來り、常の如く托鉢をなし、夜になつて市城附近の衆僧を集め、

「もろ〳〵の比丘よ、我が悟道して說きたる教法を流布し、永く佛法をして人世の福音たらしめよ、今より三月にして我は入滅するであらう、汝等怠惰の心を起さず、教

法を修習することを勉むれば、能く生死を超え、諸苦の本源を斷つことが能る」

と云つた。それより佛陀は、ベサール城を去り、各地に傳道し、豫言したる三月を終らんとする最終の夜、諸弟子を集めて臨終の期が近いたことを告げた。此時佛陀はガンジス河の一支流、ヒラニヤヴアチー河の沿岸、サラ樹林の中に居たのである。

佛陀の言葉を聞き、もろ〳〵の徒弟は等しく悲みの色を浮べ、

「佛陀百歳の後は、我等又た師とすべき人なきを哀む」

と云て、何れも雨のごとく涙を流すのであつた。

佛陀は彼等を慰めて、

「人々よ、泣くことを止めよ、又た哀むことを止めよ、我れ此世を去るとも、教法の眞理共に滅ぶものでない。我れ人々のために法を說き戒を定めた。此等の法と戒とは、我に代る汝等の師である。此の法と戒とが行はれる間は、我は永へに此世にあると思へよ、我は唯此の眞理を傳へて人生を救はんがために生れ來たものである。已

に眞理は傳へ了つた。法と戒とが汝等の間に殘り居れば、我は何時此世を去るも可なりである。何故に悲しみ、何故に泣くのである。人々は形あるものは必ず壞れ、集れるものは必ず散じ、生あるものは必ず死すとは、我が常に敎へたる所ではないか。佛陀は死すとも正法は滅ぶる時なく、正法滅びざれば我れ永久に汝等の傍にあると思へ」

と云つた。寄集れる人々は、佛陀の道理ある言葉に服し。流るゝ涙を收めんとしたが、迫り來る情は其の哀さを禁ずることが能なかつた。

佛陀は尙ほ言葉をつぎ、

「人々よ、彼の病めるものは、醫を見ざるも、與へられたる藥を飲めば、其の病は能く癒るものである、汝等は、たとひ我を見ることを得ざるも、我が殘したる法と戒とを守れば、衆苦は立どころに去る、たとひ我が傍にあるも、我が言葉を用ゐず、法と戒とを守らざれば、師ある利益はないのである」

と云つた。人々も漸く佛陀の言葉の意味深きを覺り、

「如來の出世は稀である。稀に生れたる如來は、今や衆生を捨てゝ去らんとす、我等如來最後の敎へに從つて、益々精進勤行し、生死を超えて解脫せんことを誓ひます」

と答へた。

此時天轟き地は震ひ、ヒラニヤヴアチー河上の風は、サラ双樹の枝を鳴し、人天三界の大偉人は、其の豫言したる夜に八十歳を一期として入滅したのである。

佛陀の遺骸は天冠寺に於て荼毘に附せられた。生前彼を信じたるもの等は、其の佛骨を得んことを望み、ハヾ、クミ、アラハ、ラマ、ビルダイ、カピラ、ベサール、マカダの八國は、將に兵力に訴へて之れを爭はんとした、が、彼等も佛骨のために兵を動すが如きは佛陀の敎義に悖ることを悟り、佛骨を八等分して、これを八國に分ち、八個の佛舍利塔を建てゝ、其の下に安置したのである。

佛陀に就ては尙ほ記すべきことが多いのである。けれど東西の史上彼の傳記を詳かにするものなく、殊に荒唐無稽に失するものを、悉く記す必要はない、已に以上を以

て其の大要を記し得たりと信ずるから、こゝに筆をおく事にする。

彼が成道したる後に、世人は釋迦牟尼（釋迦種族の聖人といふ意）と尊稱した。これを略して呼來つたものである。故に正しく云へば、釋迦牟尼、佛陀、牟尼、の三つの中を選ばねばならぬ、書中釋迦と稱せずして、佛陀と稱したのは、この理由に基いたのである。

——〔釋迦の生涯と思想 終〕——

大正十二年四月四日印刷
大正十二年四月八日發行

定價二圓

著作權所有

釋迦の生涯と思想

東京市牛込區新小川町二丁目四番地
著者兼發行者 小林善八

東京市神田區美土代町二丁目一番地
印刷者 後藤山吉助

發行所 東京市牛込區新小川町二丁目四番地
振替東京二一一〇二番 文藝社

發賣所 東京市神田區美土代町三丁目一番地
振替東京三三〇七番 文陽堂

—讀者の文藝を主とせる—

月刊 雜誌

藝文

毎月一日發行——定價廿五錢 送料一錢

□文藝趣味の宣揚——

隱れなる青年文士を世に紹介せんとす。

諸君の作品に對しては絶對の尊重を與ふ。

讀者にはあらゆる自由を與ふ。

定價の低廉なるは利益主義に非ざる事を證す。

趣旨に於て他の雜誌と異るところを誇りとす。

讀者諸君自身の雜誌！

散文（抒情、叙事、叙景）感想。短文。

詩。短歌。俳句。川柳。情歌。

毎號懸賞募集（毎月十五日〆切）

□純粹文藝の皷吹——

東京市牛込區新小川町二ノ四　藝文社　振替東京二一一〇二番

西尾美紗緒
小林綾子 共著

菊半截判天金箱入
優美布装幀極美

最新刊

詩歌集

鈴蘭の歌へる

定價壹圓貳拾錢
送料六錢

純眞なる乙女の囁き

昨日帰りに買つて來た
カーネーションは咲いたのに——
私の心はいつまでも
金のとびらに閉ざされて
兩手を胸に押しあてゝ
「開けて頂戴」と祈つたが
やつぱりそれも駄目だつた。
「鍵を貸して」と頼つたが
それも聞いては下さらぬ

× × × ×

指くみて月ながめつゝ思へらく悩忘れて生くる日あれと
見る人のありやはするとためらひつ君のみ便り口づけて見ぬ

發行所　東京市牛込區新小川町二ノ四　藝文社　振替東京二一一〇二番

◉皆　様！

短歌に趣味を持たるゝ皆様、先づ本書を繙かれよ！
萬葉時代の質朴勇壯なる！
貫之、躬恒、友則、忠岑などの華麗優美なる！
樂塵の五歌仙、俊成、定家等の幽玄體！
其れより德川時代の再興期！
明治大正の新思想！本書悉くこれを書き盡せり！

小林鶯里著

短歌は如何して作るか

三六判四百三十頁
優美表裝・函入
定價壹圓五拾錢
送料八錢

◉内容は！

○作歌の用意　○多讀に就て　○多作に就て　○歌の種類
○如何なるものが歌になるか　○歌言葉に就て　○雅言と俗言
○切字に就て　○題詠に就て　○歌とその系統　○各種の歌と歌の書式
○作歌の注意　○作　例　○短歌の組立　○作歌十五ヶ條
○冠辭と枕詞　○掛　詞　○短歌類語集　○源氏五十四帖
○六歌仙　○三十六歌仙　○短歌選（春・夏・秋・冬、戀、雜）

發行所　東京市牛込區新小川町二ノ四　振替東京二一一〇二番　文藝社

◈註文殺到◈

小林鶯里編　——函入美本　携帶に至便——

俳句名所めぐり

定價壹圓貳拾錢
送料八錢

▽旅行に——浸然として名所舊蹟を尋ぬる事の無意味な事よ。本書を携へて探ぐらるゝとき最も意義あり。
▽徒然に——徒然なるとき、かた苦しき書を讀むは心すゝまず。かやうな時に本書を手にせらるれば知らずして興味湧く。
▽趣味に——人として趣味なきは恰も枯木の如し。趣味の人は本書を座右にせらるれば心にかなふ。

内容は!!

日本全國到るところの千山萬水に、古來の俳士が實地に臨みて吟じたる十七字詩は累んで幾千萬を數へ、其の悉くが實景である。この短詩形は、一面には興亡盛衰の跡を語り、また一面には史蹟、傳説、逸話、地理、風俗、天景等を研究する資となるべく。時代味と、地方色とを解剖して、昔と今との變遷に、轉た感慨を深ふするものが多々ある、即ち名所俳句なるものには吾人の興味を惹るものがある。こゝには遠く宗因、芭蕉、中頃にしては蕪村、嵐雪、一茶、近くは紅葉、漱石等代表的俳士の作品を蒐めたるもの、我國民性の一特色を爲す自然觀照の程度を透徹し、それに清新微妙の響を與へ、趣味を向上一新せしめんとするものは本書である。

發行所　東京市牛込區新小川町二ノ四　振替東京二一一〇二番　文藝社

◇小林鶯里著◇

新しき童話集

四六判美麗函入二百八十頁　定價壹圓參拾錢
口繪石版刷優美畫二葉　送料入錢

面白い！

偉人の生命が不朽である如く、名著の生命も亦不朽である！

この本をおよみになる少年少女の皆様はきっと寢る事も御飯を食べる事も忘れてしまふでせう。

「新しき童話集」が盛んに賣れて行く一事はそも何を語るであらう！

發行所　東京市牛込區新小川町二ノ四
振替東京二一一〇二番
文藝社

◇小林鶯里著◇

僕の好き な英雄

口繪石版刷　コロタイプ優美畫二葉　定價壹圓
四六判美麗函入二百頁　送料入錢

英雄！　好き だ！

吉來の英雄は皆子供のときからあこがれた所がございます。

この本にはそれらの英雄の一番ぬきんでた所が面白く書いてあります。

少年、少女の皆様の好きでたまらない英雄が乾度一人二人はあります。

誰でも自分のすきな人を一人は持ってゐたいものです。

皆様の好きな英雄をこの本でさがして下さい。

發行所　東京市牛込區新小川町二ノ四
振替東京二一一〇二番
文藝社

小林鶯里著

現代日用 新語辭典（あたらしき、ことばのじびき）

三六判布製美本
定價壹圓貳拾錢
送料八錢

現代知識の庫

好評如湧 註文殺到

諸君が毎朝新聞を讀むとき、むづかしい而も新しい語を見受くるであらう、其れが何の事だか分らない事がある、其れを知つて居られば新聞記事の意味が分らぬ。又諸君が人と對話するとき、新しい言葉が隣分流行つて居る、其の新しい言葉を交ぜて話をされたとき、其れを知つて居られば恥をかゝねばならぬ。本書は現代流行の新語を蒐め、一々其れに分り易く解説を施してあるから、新聞記事の不明のところも分明し、人に對して恥をかく事もない。日常本書に依つて新知識を得、時代に遲れぬやう心がくるのが現代紳士淑女諸君の取るべき最善の急務である。

發行所 東京市牛込區新小川町二ノ四 振替東京二一一〇二番 文藝社

小林鶯里著

國民生活

四六判函入
瀟洒なる美本
定價壹圓二十錢
送料八錢

◇好評如湧◇

▽生活改善の叫び！

本書は

世にある書の様に六ケ敷く言はないで極めて親切に丁寧に說いてある。
恐らく國民日常の指導書としてこれ以上に完全なものはなからう。
恐らく吾々處世の羅針盤としてこれ以上適切な書はなからう。
本書によれば國民生活の總ては立所に了解する事が出來る。

發行所 東京市牛込區新小川町二ノ四（振替東京二一一〇二番） 文藝社

文藝社編輯部選

歴史趣味の講談

菊半截判圖入
美麗繪表紙
定價壹圓參拾錢
送料入錢

◉此賣れ行きのいゝといふ事はその本の價値を判定するに充分である。本書は現今世にある所謂講談本とは其の趣を全然異にしてゐる。

◉裝幀は！本社の最も苦心せるはその體裁にして本書の如きは實に優美にして高雅なる裝幀をなしたり。

◉携帶の便！旅行に、散歩に、徒然に、一暇を得て讀むに最も適せる樣菊半判圖入となしたり。

□讀んでゐて肩がこる樣では講談の生命は既に失はれてゐます。又讀んでゐて面白くない樣では、講談の價値はありません。本書は讀み初めたら恐らく寢る事も食ふ事も忘れてしまふであらうと思ひます論より證據!! 諸君是非一讀して御覽なさい。

發行所　東京市牛込區新小川町二ノ四　振替東京二一一〇二番　文藝社

△最新刊△

小林鶯里著

創作

大楠公

菊半截判圖入
美麗繪表裝
定價壹圓貳拾錢
送料六錢

◉嗚呼忠臣大楠公！千載に其の名を留めて忠臣の譽れ末世に高き大楠公の一生。

◉著者は！既に大楠公を崇拜し私淑せらるゝ事久し著者が熱誠を傾けて描かれたる大楠公傳。

◉本書「大楠公」は！永遠に光り輝く楠公の赤誠は全卷を覆ふて燦然たるものあり。

◉諸氏よ！諸氏は本書によりて初めて大楠公の忠誠を知る事を得。一讀をお勧めする事切なるものあり。

發行所　東京市牛込區新小川町二ノ四（振替東京二一一〇二番）　文藝社

◇小林鶯里著◇

創作

イブとその子達

四六判圖入 優美布表裝 定價二圓 送料十錢

□エデンの園に禁斷の木の實を食してより後のイブは人間であつた。恐らくイブは禁斷の木の實を食する事が、戀に惱み、俗界に苦しまねばならぬ事とは知らなかつたであらう。

□イブの子達は再びエデンの園に於けるイブの神聖には歸られなかつた。

□その子達は今日まで幾千年の間、煩悶もし、苦惱もし、懊惱もしなければならなかつた。

□本書は

著者が心血を注いで書かれたる、イブ及びイブの子達が社會に表れて如何に苦しみ惱み活動せるかを叙されたもの。

□諸氏よ

本書によればイブ以來の女性に就きて詳細に知る事が出來る。空想の樣な創作を捨てゝ眞摯なる本書に依られよ！

發行所　東京市牛込區新小川町二ノ四　振替東京二一一〇二番　文藝社

◁最新刊▷

小林鶯里著

人間としての基督

見よ!! 眞摯な傷ましい聖者の歩みを!!

西洋の聖者、否世界の聖者……としての基督も吾等と同じ人間である。戀もあつたらう！悶えもあつたらう！あの一生を人類愛を高調して血を吐く樣な基督の歩みを憶ふときは、涙なしには居られない。著者の燃ゆる樣な筆で人としての基督を活描して現然とその風丰を髣髴せしめたのが本書である。

本書によつて吾々は甫めて、巷に立つ基督の姿をまのあたり仰ぐ事が出來る。莫迦〳〵しいセンチメンタルな讀物に飽いた諸君よ！この眞摯なる聖者の足跡に親しまれよ。

布美表裝　定價貳圓　送料十錢　繪函美本

發行所　東京市牛込區新小川町二ノ四（振替東京二一一〇二番）　文藝社

小林鶯里著

最新刊

創作

釋迦の生涯と思想

布美表紙
定價金貳圓
送料十錢
瀧洒美本

◉本書の一度世に出づるや好評實に湧くが如く、註文既に數千を越え發送尚ほ日も足らざる有様なり。

◉釋迦の生涯は殆ど手にとる如く本書によつて知る事を得。世に釋迦に關する書多しと雖も或は其の後半を述べ或はその一部を描きて釋迦の生涯を通觀する事不可能なり。本書はこゝにかんがみて、その一生を詳細に發表したるなり。

◉思想は偉大なる力を有す。殊に偉人に於て然り。聖人釋迦は數千年の昔逝きたりと雖も、その思想は實に偉大なる力を後世に殘したり。

◉本書は釋迦の全生涯と偉大なる思想とを平易に而も解し易く述べられたり。現今の如く思想問題の矢釜敷く稱へらるゝとき、諸氏は本書によりてこの偉大なる力を得られん事を切望す。

發行所
文藝社
東京牛込新小川町二ノ四
振替東京二一一〇二番

504
172

終